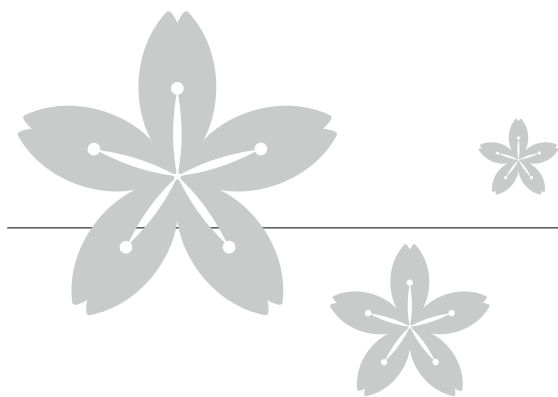




学習院女子大学
2014 年度
ラオス国際協力研修報告書



目次

はじめに

● ラオス研修とは.....	3
● ラオス研修のテーマ.....	4

第1章：事前活動

● ワークショップでの学び.....	6
「貧困とは」.....	
「開発とは」.....	
「支援のあり方を考える」.....	
● 講義での学び.....	7
安井清子氏.....	
NPO 法人ラオスのこども 野口朝夫氏.....	
JICA 東南アジア大洋州部第二課樋口創氏.....	
● 豊かさを考える発表.....	8
● ラオランチでの活動.....	9
● ラオス基本情報.....	10
.....	12

第2章：ラオスでの活動報告

● 行程表.....	14
● INノンカム村.....	
ノンカム村とは？.....	15
子どもとの交流.....	16
ワークショップ.....	18
ホームステイ報告.....	20
バーシーの儀式.....	22
.....	21

● コプチャイパーティー.....	23
-------------------	----

● INルアンパバン.....	
象乗り体験.....	24
世界遺産.....	25

● INビエンチャン.....	26
-----------------	----

第3章：研究・報告

● ワークショップ班.....	28
● 開発教育（KK）.....	34
● JICA グローバル教育コンクール.....	37
● 研修を振り返って.....	38
● 個人感想.....	39
.....	40
.....	48

第4章：未来に向けて

● 反省・改善.....	50
● 私たちから広げられること.....	51
● 報告会.....	52

第5章：お世話になった方々

● 挨拶.....	54
● お世話になった方々.....	56
● ラオスTシャツについて.....	57
.....	55

おわりに.....	58
-----------	----

ラオス研修とは

半沢里実

ラオス研修は二〇〇四年度から学習院女子大学で行われている国際協力研修の一つで、今回で一五回目の実施となる。この研修は春学期の授業の一環に含まれており、授業の中で事前学習を行い九月に十日程ラオスに滞在するというものである。ラオスでは村での滞在を中心とし、研修に参加する学生が、主体的に村の人々と交流することを大切にしている。

研修参加者は毎年二〇名前後だが、今年は総勢二十五名が集まった。メンバーは大学一年生〜三年生で構成されており、研修に参加した理由はさまざまである。そのような中、ラオス渡航に向けて、四月から約五ヶ月間、リーダーを中心にラオスで実施するアクティビティやワークショップの企画をした。ラオスの村で言葉が通じない中いかに円滑に実施するか、かなり議論し合った。また、今後はラオスでの体験を通して私たちが学んだことを発信する場として、中学校を訪問し、開発教育を行う予定もある。私たち学習院女子大学の学生だからこそできる国際協力交流、そして発信を自分たちで考え行動していくのが、このラオス研修である。この報告書は二〇一四年度のラオス研修での活動報告・分析、及び今後の私たちの活動予定を記したものである。ぜひ最後まで読んで頂ければ幸いである。

ラオス研修のテーマ

中西花穂

現地での交流をより良いものにするために、ラオス研修では毎年異なったテーマを設定している。今年度の研修テーマは「豊かさ再考〜ラオスのこどもたちのお手伝いから学べること」である。ラオス研修では、ラオスを訪問し、一方的に見る・聞く・観察・視察する研修ではなく、基本的には相互交流を通して学ぶ・体験をする。渡航前の五ヶ月間では、ラオスを知るために勉強会やディスカッションを行い、ラオスや国際協力についての理解を深めた。また現地での交流をより良いものにするために、目的を設定してラオスで実施する活動の準備を行った。私たちは今回、心の豊かさが見える側面の一つとして「家でのお手伝い」に焦点を当て、どんなお手伝いがより人とのつながりを持てる良いお手伝いなのかについて考えることにした。そしてラオスのお手伝いが日本のお手伝いよりも良いと仮定し、なぜラオスのお手伝いが良いのか、より人とのつながりを持てるのかという点から豊かさについて考察を行うため、ラオスでワークショップや調査を行った。また子どもたちに遊びを通して、お手伝いの大切さをより実感してもらうために人形劇を行い、協力してお手伝いをする大切さを伝えた。そしてラオス研修はラオスだけでは終わらない。日本に帰国した今は、ラオスで学んだ開発途上国の生活の中にある、人々やコミュニティの生きる力強さ、心の豊かさを大学祭での報告会や東京近郊の中高等学校で実施する開発教育を通して、様々な人に伝えて情報を共有する準備をしている。

ワークショップでの学び

貧困とは

最初の授業で「貧困」をテーマにしたワークショップを行った。グループに分かれて、それぞれの持っている貧困に対するイメージを出し合い、関連するものを線で結び、「貧困とは何か」ということを総括していくものである。私たちのグループでは、「貧困とは循環している」という意見にまとまった。インフラが整っていないと、道の整備もありされず学校へ行きづらいう、学校へ行かなかった子どもたちは正しい避妊の知識を持っていない。そして子どもがどんどん増えていき、人口増加となり、衣食住不足、餓死：と影響していき、やがてそれは悪循環となるのではないかと考えた。ラオスに行く前に自分たちの最初のイメージをまとめる機会となった。また、自分達が貧困に対して悪いイメージを抱いていたということにも気付かされた。

中丸 紗恵

開発とは

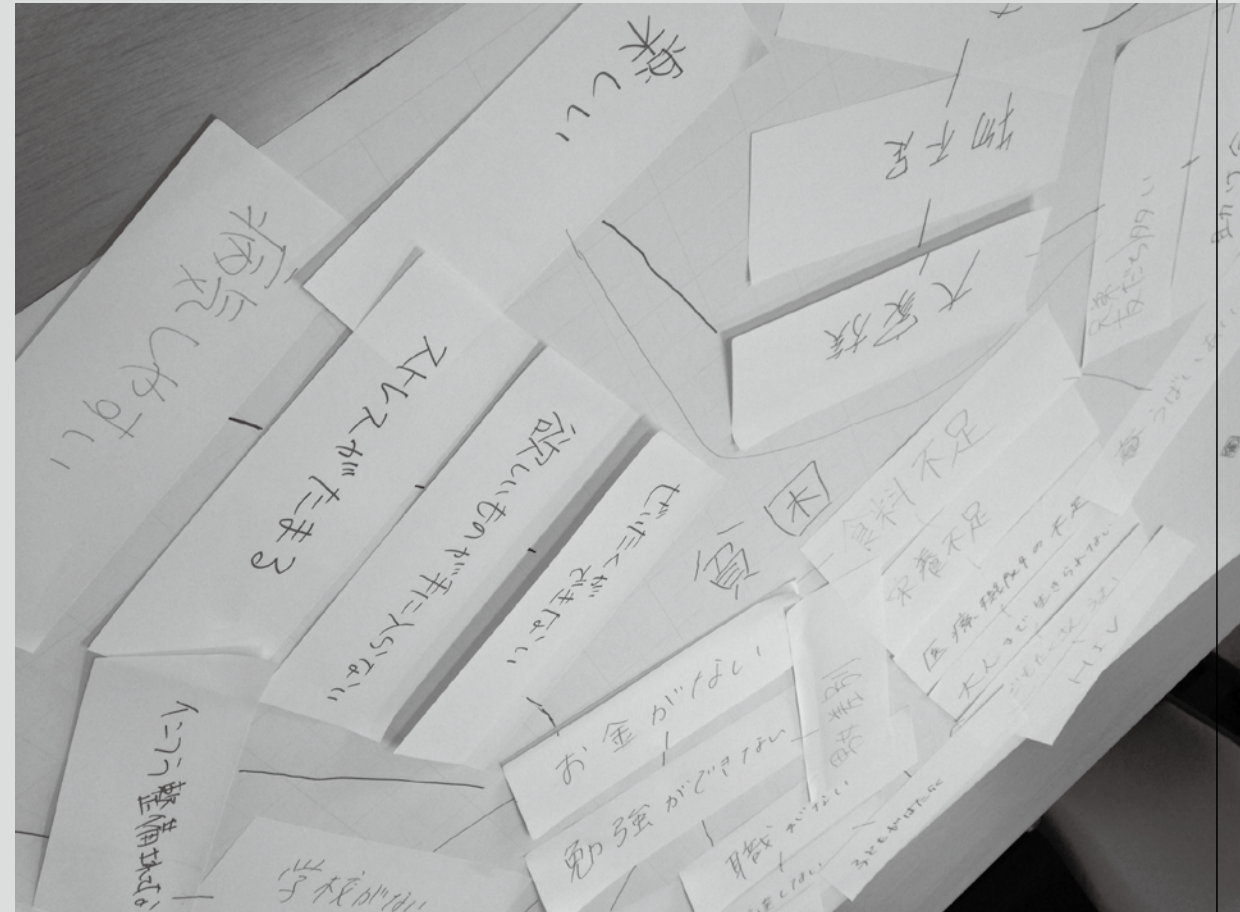
「貧困とは」のワークショップに引き続き、「開発」について大事なものは何なのかという話し合いがワークショップを通じて行われた。「開発とは」ということである」という九つの問題を自分の賛成するものと反対するものに分け、ワークシートに順位付けをした。その後、班でそれぞれ個人の分け方について説明し合い、最終的に班全体の意見を出した。結果は、各班順位付けが似ている班や全く似ていない班があった。これは、現地にいる人間の視点で考えるか、それとも開発する側の視点で考えるかの違いがあったためである。ひとことに「開発」と言ってもいろいろな考え方があり、全てを汲むのは難しいのだからこのワークショップを通じて思った。

佐藤 由理

支援のあり方を考える

三つ目としてタイの農村部にあるバーン小学校についての説明カードを三枚読み、アイ子という女の子の支援の仕方についてのワークショップを実施した。それぞれの班で三つの質問について議論した。一つは、「あなたはアイ子の呼びかけにこたえバーン村の小学校に十ドルを寄付しますか、またその金額はいくらか」という質問で、結果は〇ドルが半分以上で、その理由は信憑性が無いという意見が多く見られた。二つ目は、アイ子の活動について賛成か反対か、やや賛成か反対かという質問で、どの班もアイ子の支援活動を完璧に肯定も否定もしなかった。その理由は助けたいというアイ子の意欲や積極性は評価するが、使い道が偏り過ぎということや信憑性が無いことが問題視されたようだった。これは「支援とは何か」そして、支援のあり方を考える良い機会だった。

石渡 利奈



第1章：事前活動

講義での学び

安井清子氏

安井清子氏はSVASHンティ国際ボランティア会のスタッフとして、モン族の子どものための図書館活動に携わり、その後、ラオスにて子ども図書館活動、モン族の民話記録などを行っている。二〇〇四年には「ラオス山の子ども文庫基金」を設立、ラオス東北部の山の村ゲオバトゥ村に長期滞在して、村の人たちとともに図書館を作った。現在もモンの村二か所とビエンチャンの自宅横で、子ども図書館活動を展開している。また、村の伝統文化である刺繍を利用した山のふもとの刺繍屋さんを設立し、刺繍をほどこした小物を売るマーケット開拓を支援している。安井さんの話を聞き、図書館こそがより身近にできる教育だ、とゆうことを再認識した。本を読むことで教育の一番の土台である文字を覚える。その土台をしっかりと付けなければ先には進めない。その時、私は安井さんの活動にとっても感心を抱いた。

永井 詩織

NPO法人ラオスのこども 野口朝夫氏

「ラオスのこども」事務局長である野口朝夫氏よりラオスの豊かさを理解するために、ラオスの開発の現状、抱える課題等について講義していただいた。野口氏はラオスの豊かさをラオスの衣食住についてお話をしながら説明して下さった。ラオス人と結婚された野口氏のお話の中には、私たちが文献で読んだことや調べたりしても知り得ないことが沢山あり、ラオスの人々の実際の今の生活スタイルを想像することができた。また、今のラオスの課題において、貧富の格差拡大、少数民族、自然破壊、中国の影響等の話があり、ラオスの豊かさを理解するために、またさらに豊かになるためにこれらの課題を解決していく必要があると感じた。

久保 結奈

JICA東南アジア大洋 州部第二課 樋口創氏

国際協力機構JICAは政府開発援助の実施機関であり、政府同士の援助であるが、現場のニーズにそった支援活動がされている。職員数は約一八〇〇人。ラオスにおける活動内容としては、技術協力、無償資金協力、有償資金協力事業、ボランティア事業がある。有償資金協力の割合が大きく、技術協力や無償資金協力に比べると、金額が一五〇〇億円ほどなのに対して、八六〇〇億円である。また、ラオスにおいてのさまざまな支援は、プランニングから実施まで包括的に行っており、環境にも配慮した経済成長の促進に重点を置いた援助の実施を目指している。大きな機関であるのに関わらず、現地のニーズにあった支援を行っていることがわかった講義であった。

金子 ひかり

豊かさを考える発表

私たちは授業の中でワークショップを行い、講義を聴くなかで、国際開発について、そしてラオスについて学んだ。多くの学びを通して、今回の研修のテーマでもある「豊かさの再考」が、開発が進んでゆく中で重要であることを認識した。また「豊かさの再考」をするためには、「豊かさとは何か」を考える、つまり開発の目的を明らかにすることが必要であると考えた。研修でこの目標を達成するために、まずは渡航前にできることとして、少しでも「豊かさの再考」の助けとなる情報の収集を行う必要性を感じた。そこで先進国であり、私たちの住む日本の「豊かさ」と開発途上国であるラオスの「豊かさ」をはかる助けとなるデータを考察し、比較してみることにした。私たちは六つのグループに分かれ、各グループで違うデータを読みとり、自分達の考察を含めて発表を行う場を設けた。使用したデータとしては、「平成二十五年度版 子ども・若者白書」や

「国民生活に関する世論調査」、「社会意識に関する世論調査」等がある。私たちのグループは内閣府が子ども・若者育成支援推進法に基づく年次報告書として作成している「平成二十五年度版 子ども・若者白書 第六章」から日本の子どもの生活や行動意識のデータを見て、自分達なりに現在の日本社会の状況を分析してみた。若者によるインターネットの使用状況が非常に多いデータやスマートフォンを持っている若者が増加しているデータがあった。これらのデータから先進国では手に入れたいものがすぐに手に入る、情報やモノにあふれている日本の現状がわかった。このような私たちのグループのデータや他のグループのデータを分析・考察することで見えてきたこととして、日本とラオスにおいての「豊かさ」には違いがあるのではないかという疑問だった。日本は物的に豊かであるが、その影響で他者との関わりが以前に比べて減っていることがわかつ

た。それに対してラオスは社会資本という社会的ネットワークにおける人間関係を表す割合が非常に高いことがデータ上でわかった。このような割合が日本は必ずしも高くないが、日本における若者の幸せ度調査では、以前の調査時より幸せと感じている人口は増えているという意外な調査結果も中にはあった。しかし、全体の発表を通して、物的豊かさは低い、人との交流が密接に行われていることがラオスの「豊かさ」と密接に関わっており、日本の「豊かさ」とは別物であるのではないかと考えた。このような発表を通して、本当の意味での「豊かさ」とは何なのかは一言で表せないものであり、これからラオスでの体験を通して、私たちが学び表現するべきであると感じた。ラオスに行く前にこのような気づきを得ることができ、研修のテーマである「豊かさの再考」を行う上で非常に大切なものとなった。

半沢 里実

ラオス基本情報

【正式国名】

ラオス人民民主共和国
(Lao People's Democratic Republic)

【位置】

中国・ベトナム・タイ・カンボジア・ミャンマーを隣接国とする。
ラオスは東南アジア唯一の内陸国である。



【面積】

二四万km²
日本の本州とほぼ同じ広さ。

【地理】

国土の三〇%以上は標高五〇〇～二〇〇〇メートルの山地で占められている。メコン川が流れている。

【首都】

ビエンチャン

【人口】

約六二六万人
面積に比べて人口は少ない。
大部分は稲作を中心とした農業を営んでいる。

【民族】

ラオ族（全人口の約半数以上）を含む計全四九民族。

【言語】

公用語はラオ語（ラオス語）
大都市のホテルや商店では英語が通じる場合が多い。

【気候】

一年を通して熱帯モンスーン気候。
一般にラオスの気候は夏季（三～五月）、雨季（六～十月）、乾季（十一月～十二月）の三つに分けられている。
雨季は比較的涼しく過ごしやすい。

【宗教】

仏教（上座部仏教）

【日本との時差】

日本との時差はマイナス二時間で

ラオランチで活動

ラオランチとは九月のラオス渡航へ向け、事前学習の一環として火曜日のお昼休みに行う、ラオスについて学習する勉強会のことである。ここではラオス人留学生に来ていただき、あいさつなど日常会話程度のラオス語と一緒に勉強すること、授業では扱うことができないラオスの基礎情報を各班に分かれて調査し、発表・共有の場とするという二つの目的を持って活動を行った。ラオランチは学習の場であるとともに、日本人学生とラオス人留学生が昼食を一緒に食べながらラオスと日本の文化の違いについて話し合ったりする、貴重な交流の場にもなっている。今年度のラオランチは六月から始めた。まずはラオランチ担当で話し合いをし、ラオス語の学習に必須なラオス語の教材作成をした。「こんにちは」「ありがとう」などの基本的なあいさつからホームステイ先で会話

のきっかけとして使えるフレーズなど過去の担当者が作成したラオス語BOOKを参考にしながら行った。また同時にラオスの基本情報について研修者同士で共有するために、ラオスでの活動班それぞれに「政治」「経済」「環境」「教育」「文化」「国際協力」という分野を割り振り、発表してもらうように計画した。またラオス人留学生の方にも来てもらえるように手配をした。今年度ラオランチに来ていただいたのは日本文化学科一年のスパボン チャンタヴォンさん（トゥミーちゃん）である。
毎回のラオランチの流れとして、まずはラオスでの活動班によるラオスの基礎情報についての発表をしてもらう。その後ラオランチ担当者が作成したラオス語の教材を用いて、ラオス人留学生であるトゥミーちゃんとともにラオス語の学習をする。トゥミーちゃんのサポートのおかげ

で研修者は楽しみながら学習が出来たのではないかなと思う。覚えたことをそのままにしておいては使えるようにならないため、二週間に一度の頻度でラオス語のテストを行った。このテストのおかげで研修者がラオス語と触れる時間が設けられたと思っている。全ての回が終了した後、しおりに載せるためにラオス語BOOKを作成した。
今年度は前回の研修よりも活動が少し遅くなってしまったが、研修者の協力もあってスムーズにラオランチが行えたと思う。回を重ねることに楽しんで参加してくれる様子をみて、頑張った良かったと思えた。今年度のラオランチを通して、研修者へ有意義な時間を提供することが出来たと思う。

担当者：

小川杏奈・金子ひかり・村田瑛美子

ある。

【通貨】

通貨の単位はキープ（kip）使用されているのは紙幣のみで硬貨はない。ホテルやナイトマーケットなど大半のお店でアメリカドルが使用できる。チップは基本不要。

【国旗】

上から赤・青・赤のラインが横に入り、中央の青の部分の中心に白い円が書かれている。赤色は、自由と独立のために流された尊い血の犠牲を、青は国家の繁栄とメコン川を、白い円は平和と輝かしい未来の展望を象徴している。



（参考文献）

地球の歩き方HP ラオスの概要
外務省HP ラオス人民民主共和国
世界の国旗図鑑HP ラオスの国旗

佐藤 由理

ラオス文化

ラオスの人々の生活は生活様式に至るまで仏教の影響を大きく受けている。仏教だけではなく精霊信仰という森林に棲む精霊への信仰もある。ラオスの料理はあふれる山の幸・川の幸に、香辛料をミックスされた純朴な味。主食はもち米で、蓋付きの竹の入れ物「ティップ・カオ」に入れ、素手で少しだけつまんで軽く丸めたり、炒め物の汁などに少し漬けたりしながら食べる。伝統文化として手織物や竹製品などがある。ラオスの手織物はデザイン、色合いなどが斬新で、「織物の宝石」と呼ばれている。ラオスでは建物や工芸品に竹が多く利用されており、農村にある建物の壁の一部や天井は、竹を編んで作られている。

ラオス環境

ラオスは、インドシナ半島の中心に位置し、北は中国、南はカンボジア、東にベトナム、北西にミャンマー、西にタイと五カ国に国境を接する東南アジアの内陸国である。国土面積は二四万キロメートルで日本の本州と同じ大きさである。ラオスの気候は暑季、雨季、乾季に三分している。暑季は三〜五月、雨季は六〜十月、乾季は十一〜二月とされる。気温は、最も暑い時期が三〜四月で三八℃くらいまで上がるが、最も寒い時期である十二〜一月には十五℃前後まで下がる。また北部の高地では夜間に〇℃まで下がることもある。ラオスの自然資源は森林・鉱物・水などであり、自然環境の現状として人口増加や違法伐採、持続可能性を考慮しない資源開発によって脅威にさらされている。

ラオス教育

ラオスの教育制度は、就学前教育、一般教育、教員養成を含む技術・職業教育訓練、高等教育の四つの教育段階から構成される。就学前教育には保育所と幼稚園が含まれ、一般教育には初等教育（一年生から五年生）五年間、前期中等教育（六年生から八年生）三年間、後期中等教育（九年生から十一年生）三年間の合計十一年が含まれる。この四つの教育段階のほかにノンフォーマル教育が、正規教育の代替教育もしくは成人教育として提供されている。五年生までの残存率は二〇一〇年では六八・七％であり原因として言語の壁、地域差、コストなどがある。

中西花穂

ラオス経済

ラオスの通貨単位はキップ（一〇〇キップ約一、三円）である。GDP（国内総生産）は一人当たり一四〇〇ドルでありASEAN（東南アジア諸国連合）域内では最下位クラスで二〇一五年までに一人当たり一七〇〇ドルの達成を目標としている。主な産業は農業（約七割）や鉱山開発や水力発電、サービス関係では観光業や飲食業である。主な貿易相手国としてはタイや中国、ベトナムで日本との関係はラオスへのODA（政府開発援助）供与実績は日本が一位で日本側の主な輸出品は乗用車、建設・鉱山用機械、日本側の主な輸入品はコーヒーやケイ素他無機化合物などである。

ラオス政治

ラオスの政体は人民民主共和制であり、チュンマリー・サイニャソーン国家主席が元首である。国民議会では一院制一三二名で党政治局員のパーニー・ヤートートウが議長を務めている。また二〇一一年四月に第七期国民議会総選挙が行われ、六月に初回会議が開かれ、チュンマリー党書記長が国家主席に再任された他、トンシン首相、トンルン副首相兼外相、パーニー国民議会議長が再任。（平成二五年十月二四日現在）

ラオスの国際協力

日本政府はラオスとの二国間援助として日本は貧困削減を目的とした協力を行っている。また、ラオスの発展を妨げている最大の要因とも言われる人材不足に対応すべく、各分野での人材育成、高等教育支援など「人造り」に焦点を当てている。一方、インフラ整備にも重点を置いている。国際機関はラオスへの支援政策としては農村開発、都市計画・インフラ整備、保健医療の分野に無償有償援助を実施。日本のNGOはラオスの支援策としてAJAR Japan（難民を助ける会）は首都ビエンチャンでの障害者支援や北部シェンクワン県での地雷・不発弾対策を行っている。また「特定非営利活動法人ラオスのこども」は読書推進、教員対象のセミナー実施、出版プロジェクトを行っている。

中西花穂

行程表

日付(曜日)	地名	現地:時間	スケジュール
9月4日(木)	成田	10:00	VN311 出発
	ハノイ	13:30	ハノイ 到着
	ハノイ	18:50	VN2905 出発
	ルアンパバン	19:50	ルアンパバン 到着
9月5日(金)	ルアンパバン	5:30	托鉢
		8:30	事前オリエンテーション
		9:30	村へ向け出発
	ノンカム村	12:00	村へ到着
9月6日(土)	ノンカム村		各家庭にて活動
			※村の生活体験
			※子どもたちとの交流
9月7日(日)	ノンカム村	10:00	子どもたちとの交流
		14:00	ワークショップ
			KK班活動
9月8日(月)	ノンカム村	9:00	バーシーの儀式
		12:00	村出発
	ルアンパバン	夕刻	ホテル着
9月9日(火)	ルアンパバン	10:00	象乗り体験
			世界遺産ルアンパバン観光
		18:20	QV104 ビエンチャンへ
9月10日(水)	ビエンチャン	19:00	夕食後ホテル
		10:00	ラオスのこども 視察
			AAR(難民を助ける会)視察
9月11日(木)	ビエンチャン	18:00	振り返り
		9:00	ブッダパーク
		12:00	自主研修
		17:00	ホテル出発
		20:00	VN920 出発
9月12日(金)		21:00	ハノイ 到着
	ハノイ	0:10	VN310 出発
	成田	7:35	成田空港 到着



第2章：ラオスでの活動報告

ノンカム村とは？

ラオス北部にある世界遺産都市のルアンパバンの中心部からバスで約二時間、更に船で川を登っていくといよいよノンカム村が見えてくる。ノンカム村の人口は二〇二人で四一世帯である。ほとんどの人々が農業をしている。男の人は釣りに行ったり森から食糧を調達したりして生活している。主な農作物はトウモロコシと胡麻である。また女の人はラオスの伝統衣装であるシンを織ることを職としている人が多い。村には家々と少し離れたところに学校が一つあり三学年に分けられている。村では、あちこちで子どもたちが楽しく遊ぶ様子がうかがえる。自然が豊富で人々の関わりが非常に強いすてきな村である

大野 夏菜



子どもとの交流

アイスブレイク

根本 真莉絵

今回の子どもとの交流班は「子どもたちのお手伝いから学ぶこと」とテーマを掲げた。そのねらいは、子どもたち遊びを通して、お手伝いの大切さをより実感してもらうこと。また、日本の子どもたちと比較しながら、自分たちのお手伝いに対する思考を見直すことである。

最初に子どもたちと打ち解けるためにアイスブレイクを用意した。天気にも恵まれ日差しが強いなか行われた。アイスブレイクの一つである「だるまさんがころんだ」は、はじめに子ども班が例として行い、言葉では理解できないところを埋めた。私たちが想像していた以上に村の子どもたちが集まってくれたこともあり、迫力のあるだるまさんがころんだになった。かけ声の「だるまさんがころんだ」が子どもたちにとって難しく、そして鬼（だるまさん）と距離を長くたったため聞こえなかった。しかしラオス国立

紙芝居

古谷 理恵

大学の通訳ボランティアのフォローもあり進行が止まることはほとんどなかった。二つ目は「へびじゃんけん」。人数が多いため待ち時間が多くなり、また一度自分がじゃんけんし終えたら出番がなく、見物するだけということになってしまった。子どもたち全員で楽しめる点で欠けていた。しかしアイスブレイクのねらいは達成することができた。

次に紙芝居と人形劇の融合したものをを行った。目的は、研修のテーマでもある「ラオスの子どもたちのお手伝いから学ぶこと」を軸に、お手伝いを通して協力することの大切さを認識してもらうことだ。なぜ紙芝居と人形劇の融合にしたのかというと、人形劇にすることで登場人物に動きをつけ、なるべく言語に頼らない方法で内容を把握してもらうためだ（以後、略して紙芝居とする）。話は『おおきなかぶ』を土台にした『おおきなか

な』である。魚に変えた理由は、ラオスではかぶよりも魚の方が食べられているし、親しみがあるのではないかと考えたからだ。内容は、釣りに行ったお父さんの釣竿に大きな魚がかかり、一人では獲ることが出来なかったため、家族が手伝いに行き、協力して釣れた魚を家族でおいしく頂くというものだ。この紙芝居は全てを一から作するため、昼休みや放課後に集まり作業をした。主な作業として、背景の模造紙に描いた絵を絵の具で塗る作業、人形の絵を描いて人形の形に切り取った段ボールに貼り付ける作業。中でも難しかったのは、セリフを日本語からラオス語に訳して練習することだ。我が校にいらつしやるラオスからの留学生のトゥミーさんに訳をお願いし、発音が正しいかどうかを確認して頂いた。研修生での事前の集まりの際にも発表をし、本番と同じような立ち位置も確認出来た。ラオスの村に入り、子ども班が集まり最終確認をした際、聞いてもらっていたラオス大学の生徒の方に発音を注意して頂いた。発



一人という事前の情報だったが、その先生にはインタビューの際にはビエンチャンへ出張のためにお会いする事ができなかった。しかし、もう一人男の先生も働いており、その方からお話を聞くことができた。まず、一問目として「どうして先生になったのですか」と訊ねた。すると、先生は「もともと私はラオ高知民族なのだが、ノンカム村が教員不足だったため、ここで教員をやることになった。公務員試験を受け、公務員になって基礎的な研修を終えた後、私は先生になった。」とおっしゃっていた。この方は教師歴が四〇年以上になるベテランであり、もう退職する年齢に達しているのだが、先生不足のため、まだ教師を続けているという。だが、二年後に省から先生が派遣されるので、今後の一二年はどうかかわらないらしい。そんな状況の中でも、教師であることは楽しいかと訊ねると先生は、大好きな子どもたちと一緒にいれるしとても楽しい、教師をやめてもPTAな



表は村の小学校の教室内で行われ、子どもたちが興味を持って見守る中で始まった。発音に不安はあったものの、ゆっくり聞き取りやすく言うように班のメンバーで心がけた。子どもたちははたたくさん笑ってくれ、魚を引く張る動作を村の子どもたちのうち二人にやってもらうつもりが、何人もの子が出て来て紙芝居に参加をしてくれた。紙芝居終了後、彼らに質問をした。三人の子どもに「紙芝居は楽しかったか。」「紙芝居を見て何が大切だと思ったか。」を聞くと、全員が「楽しかった。」「皆で協力することが大切だと思った。」という、子ども班が立てた目的を汲み取った答えであった。セリフが的確に伝わったかどうかは不安であるため、その点は反省箇所だが、子どもたちが楽しんでくれ、私たちが伝えなかった趣旨を理解してもらうことが出来て良かった。

竹とんぼ

三輪 玲菜

子ども班は、私たちと過ごした思い

出として子どもたちに何かプレゼントをしたいと思っていた。思い出としてずっと残るようなものはないかという思いのもと、日本の伝統的なおもちゃであり、子どもたちが絵を書いて自分のものとして大切にしてくれるのではないかと考え、竹とんぼにした。紙芝居が終わったあと、竹とんぼの制作が始まった。子どもたちは配られた竹とんぼを不思議そうに見ながら、ペンを配られると好みの色を一生懸命選び合っていた。友達と絵を見せ合いながらのお絵描きが終わると、早く飛ばしたいというような様子で外へ元気よく出て行った。「ヌン、ソン、サーン」とみんなで一斉に竹とんぼを飛ばして、本当に楽しそうに遊んでくれた。竹とんぼを飛ばせない小さな女の子が、私が飛ばした竹とんぼを何回も取ってきてくれた姿はとてもかわいかった。子どもたちが竹とんぼにそれぞれ好きな絵や名前を書いてるとき、よく晴れた外でそれを楽しそうに飛ばすときの子どもたちの笑顔は本当に素敵だった。

どで子どもたちと関わっていききたいと述べていた。このインタビューから、ラオスの教員不足の問題や、教師をやめても子どもたちとのコミュニティを大切にしたいという人々とのつながりの強さを垣間見ることができたと思う。

感想

小川 里彩

事前に幾度となく話し合いや製作に時間をかけてきた甲斐もあり、当日村での子どもとの交流でのアクティビティはスムーズにでき、紙芝居も上手いき、子どもたちの反応も良かったため、成功という形で終えることができたと思う。活動にあたり、一番大変だったことは、紙芝居の製作である。絵の製作はもちろん、ラオス語で物語を話すため、ラオス語の発音に注意して何度も練習を重ねた。ノンカム村で発表がある前日までセリフの変更があり、戸惑うことも多かったが、ラオスの子に発音のチェックを念入りにしてもらい、練習の成果もあつ

歌とメダル贈呈

大野 夏菜

私たちは、日本の歌を知ってもらうのと同時に感謝の気持ちを表現するため、「幸せなら手を叩こう」を全員で歌った。また事前に折り紙で作ったメダルの贈呈も行った。流れとしては、私たちと子どもたちがごちゃ混ぜに円を作ったあと歌を歌い、そのあと学女生と子どもたちがそれぞれ一列になり、正面の子どもにメダルを渡した。「幸せなら手を叩こう」では、言葉は通じないが、子どもたちも真似をして一緒に手を叩いたり足踏みしたりととても楽しい時間を過ごすことができた。一方、日本の文化の一つでもある折り紙で作ったメダルに、子どもたちは興味を示し喜んでくれた。

先生へのインタビュー

吉田 千織

私たちは今回、ノンカム村の小学校で教師をしている先生にお話しを伺った。ノンカム村では女の先生が



で、私達自身が楽しくやる事ができた。また、「みんなで協力する大切さ」という目的も子どもたちに伝わって良かったと思う。子ども班のアクティビティの反省点としては、アイスブレイクの『へびじゃんけん』で距離が短かったためか暇を持て余す子が出たりもしてしまったため、そこがもっといかなかったところである。また、面白かった点は、竹とんぼを飛ばすのが私達日本人よりもラオスの子どもたちの方が上手であったということである。全体的には、子どもたちが楽しんで取り組んでくれて、みんなで一体となつて時間を過ごせたのがとてもいい思い出である。

ワークショップ



「目的」

「豊かさ」とはなんであろうか。しばしば、「豊かさ」を測る際には、所得やGDPを用いられることが多い。しかし、日本のように、ただ所得があるからといって本当にその人は「豊かさ」を感じているのか。そして、物的に満たされている生活において感じる「豊かさ」と完全に一致するものなのか、という疑問から目に見える経済的な面だけでは「豊かさ」を測ることはできないと推測した。そこで私たちは、「豊かさ」には目に見える「経済的な豊かさ」と、その対照として目に見えない「心の豊かさ」も存在していると仮定した。では、「心の豊かさ」はどのように定義されるのであろうか。私たちは「心の豊かさ」を人との関わりで作り上げることができると考える。人との関わり合いが深いほど、その人自身の「心の豊かさ」は満たされることになるということだ。ラオスでは数日を一緒に過ごす中でノンカム村の「心の豊かさ」を測る。

「テーマ」

人との関わりからわかるラオスの心の豊かさ

「対象者」

村の小学生、その父親世代、母親世代、祖父世代、祖母世代、高校・大学生世代

(各四人×十グループ 計四〇人)

「村人にとってのメリット」

日本との比較から、ラオスのいいところを再確認してもらう。

「ワークショップ」

一日のタイムスケジュール（その時々で一緒にいる人も記入） 十心の豊かさを測るための質問

- 一、どの時間が幸せか（またそれはなぜか） ↓ マークや順位づけ
- 二、一人の時間はあるか（幸せか、もしあつたら幸せだと思うか）
- 三、家族でご飯を食べているときに会話はあるか（どんな話か）
- 四、一日で誰と一番話すか



「進め方」

一、あらかじめ日本人に調査をして
いく

二、調査対象者と学女生が一か所に集まりワークショップ

三、発表

鈴木 笙子

※ワークショップ詳細は28ページ

33 ページを参照

私たちは一家庭につき三、四人に分かれて、ノンカム村にて三泊四日のホームステイを行った。その中から一つの家族のステイ中の様子に焦点を当てて報告する。

家族構成

ポー（父親）、メー（母親）、長女、次女、日が照っている中、私達が「暑い、暑い」と言って皿洗いのお手伝いをしていると、言葉はわからなかったと思うのに、長女が日傘をさしてくれて、とても優しい子だなと思ったのが長女の第一印象である。次女はよく食べる子で、四歳の割には大きくて可愛い印象であった。ポーとメーは、優しい笑顔で私達を迎え入れてくれた。

ラオスの料理に不安は感じてはいないものの、メーの作る料理はどれも本当に美味しかったのだが、ラオス人向けであったため、味付けがほとんど辛く、よく私達は「ベツ。ベツ。（辛い、辛い）」と言いながら汗をかいている

家族構成

私たちは一家庭につき三、四人に分かれて、ノンカム村にて三泊四日のホームステイを行った。その中から一つの家族のステイ中の様子に焦点を当てて報告する。

と、ボーとメーとグリーンディスカバリーのガイドさんとラオス大学の子は、そんな私達を見て笑っていた。しかも、辛いのを苦手なことを知ると、私達のために辛くない味付けのものも作ってくれて、気を遣わせてしまったと思つた上に、家族の優しさに触れっぱなしであつた。最初は、私達が話せるラオス語のレパートリーが少なく、なかなかコミュニケーションもとれなかつたのが、ガイドさんとの意思疎通も図れるようになってきて、食事をする度に会話が増えていくのを感じ、次第にボーやメーから話しかけてくれることも多くなり、心を開いてくれたというのがわかつた。また、娘二人は恥ずかしがり屋で、最初、長女はご飯と一緒に食べなかつたり、次女は目が合うとどこかに行つてしまつたりしていたのが、二日目、三日目とどんどん私達とも馴染めるようになっていくのがわかつて、仲良くなれたのが嬉しかった。なにより長女は、料理の準備・片付けから他の赤ちゃんのお世話など、あらゆる全て

のことをこなしていて、十二歳とは思えないほどのしっかり者で感心してしまつた。次女も、四歳なのに、メーや長女が使う包丁を、使っていたりして、私達の方がひやひやとしてしまう状況であつたが、メーは次女が包丁を使う時は必ず側にいて見守つていたので、ノンカム村ではそのような開放的な育て方が主流なのかと驚いた。同時に、村の子どもたちが伸び伸びと生活しているのはそのような育て方も影響しているのだろうと感じた。私達は、家族と色々な体験をさせてもらつた。まず、畑に行き、サトウキビやトウモロコシやキュウリを収穫した。キュウリは日本の長細いのではなくて、大きくて丸い冬瓜のようなものの正体がキュウリであつた。収穫したものを食べさせてもらつと、味はたしかにキュウリであつた。トウモロコシは日本のものよりも小さく、歯ごたえ弱いがもちもちしていて変わつていた。釣りをしに川へ行つたら、釣り竿では釣れないと言ひ出して、男性の人達は自ら川へ飛び込み手探りで魚を捕まえる

バーシーの儀式



ノンカム村での最終日、私たちはバーシーの儀式を経てノンカム村を後にした。バーシーの儀式とは、主役となる人の健康や幸せ、安全、繁栄を願って行う儀式のことである。この儀式は、出生や結婚、死別といった人生の節目に加えて、歓迎や送別、厄払いの際にも行われる。人間の身体には三十二個の魂が宿っており、それが体内に存在するときは幸せで、体外に出ると不幸になると言われている。そして、体外に出るのは人生の節目や旅立ちの時と言われているため、私たちがノンカム村を去る際にノンカム村の人々全員が準備してくれたのだ。ラオスには精霊信仰が残っており、ラオス人にとってバーシーの儀式は日常生活の中の儀式として定着しており、非常の重要な儀式であるようだ。

バーシーの儀式の中心となる祭壇のような丸いお盆の上には、バナナの葉で作られたツリーと、その周りにはお花と白い糸の束がきれいに飾れていた。この飾りは村の女性が前日から準備したものであり、私たちも少しお手

伝いすることができた。実際に手伝ってみると、一つ一つ細かい作業で、大人数で行わないと終わりの見えない作業で大変であった。その手間暇かかった大きな飾りから、始まる前からバーシーの儀式は盛大な儀式なのだと窺うことができた。そして、そのお盆の周りには、ご飯やお菓子といったご馳走が並べられていた。これらのお盆を中心に私たち学女生と村の人全員が囲む状態でバーシーの儀式が始まった。バーシーの儀式を行う中心となる人物は、お経のような祝詞を唱え、私たちの健康や安全を願ってくれた。祝詞が唱えられている最中、村の人々の真剣な雰囲気伝わってきて、ラオス人にとっても重要な儀式であるのだと感ずることができた。祝詞が終わると飾っていた白い糸を村の人々が取り、私たちの手首にお経を唱えながら結び始めた。村の人全員が次々に私たちの幸せを願って結びつけてくれ、私たちの手首は白い糸でいっぱいになっていった。その結ばれている際の皆が唱えているお経の意味は理解すること



丸山実可子

はできなかったが、皆の温かい思いが非常に伝わってきた。それは儀式という表面上のものではなく、本当に私たちの幸せを願う強い思いであった。このバーシーの儀式は幸せな雰囲気包まれており、私たちは温かい気持ちを持って嬉しい反面、別れが悲しくて文化であるバーシーの儀式を体験することができたことは、私たちにとって非常に貴重な経験であり、そして一人一人が改めてノンカム村の良さを再確認することができたであろう。



ていた。また、その光景を見た男の子達も真似して川へ入り込んでいた。私達はラオスの人々はとてもアクティブだなどとも驚いた。収穫した野菜と川魚が食卓に並ぶと、まさに自給自足ということを実感した。ホームステイ先の子どもを見てもそうだが、子どもたちは何でも食べていて好き嫌いがいい様子であった。その理由としては、自分が関与して収穫物を使って、料理のお手伝いにも携わっているからなのかなと感じられた。

ラオスの伝統的な料理であるもち米にココナッツを練り込み竹に入れて焼くカオパート・マントンや、もち米を丸めて竹串にさして卵をつけて焼く料理の体験などもさせてもらった。みんなで一緒に話しながら作るのが楽しいひと時でもあった。ノンカム村での生活はのんびりとしていて、実際に時計もなく時間に追われるということがなかったため、遊びたい時に遊んだり、昼寝したい時に昼寝していたり、ポーも朝からアルコールド

の強い焼酎であるラオラオを飲んだり、みんなが自由に生活しているなど感じた。しかし、自由だからとはいえ、ご飯の時には自然と集まってきて、何も言わなくてもわかり合っているところが新鮮であり、とても居心地がよかった。三泊四日というあっという間なホームステイであったが、私達のことを本当の娘、本当の家族のように接してくれた。ホームステイだけでなく、村全体が一体となって、家族のようであったため、ノンカム村は本当に素敵な村だなと感じた。そして家族だけでなく人を思いやる心というのがすごく伝わってきた四日間であった。この研修でしかできない経験ができて本当によかったと心から思う。家族、村の人々には感謝でいっぱい。

小川里彩





INルアンパバン

像のり体験

ルアンパバン最終日、私たちは象乗り体験を行った。研修生を二つのグループに分け、前半組と後半組で象に乗った。象に乗る際の注意として、大きな声で騒がないこと、と言われた。私は前半組で先に乗らせてもらった。一頭の象につき研修生二人が乗ることができ、象の背の中に取り付けてある椅子に二人で座った。それに一人の象使いのお兄さんが乗り、象乗り体験が始まった。ここで、象乗り体験をして感じたことを二つに分けて書きたいと思う。一つ目は象の乗り心地についてだ。椅子には渡し棒がしてあり、その棒を掴んで落ちないようにするのだが、始めのうちは揺れて不安定だったのだ、落ちないか心配だった。ゆっくりと進んでいるのだが、バランスを取るのが難しかった。象使いのお兄さんは何も付けないで象の首あたりに乗っていた。途中、乗っている私たち二人の写真を撮ってあげるよ、と

いう風に後ろを振り返ったお兄さんの申し出はありがたかったが、お兄さんが落ちはしないか心配だった。だんだん慣れた頃、お兄さんが座っている場所と交換してもらえた。揺れて落ちてしまうのではないかと思ったが意外と安定していて、私は椅子に座って乗るよりも気持ち良かったと感じた。象に直接座ってみて分かったことは、毛が太くしっかりしていることだ。私は生地が厚いズボンだったので平気だったが、薄い生地の人には痛かったと言っていた。二つ目は景色についてだ。乗っている間普段よりも高い位置で景色を見られることで、より広く遠くまで見ることが出来た。川の浅瀬にも入ってくれ、反対の岸にある村も見えた。途中寄り道をしながらゆっくりとした時間を味わえた。発見と気付いたこととしては、大人三人を乗せている象は何歳ぐらいなのか気になった。象使いのお兄さんに聞いてみたところ、四五歳とのことだった。象の寿命は約七〇歳なので少しお年寄りな



古谷理恵

のかもしれない。また、後半組が象に乗っている間休憩していた時、残った象が直径十五cmくらいの太さの輪切りにされたバナナの木を食べていた。近くにかかっていたボードを見ると、それぞれの象の好物が書かれており、果物類が多いためか側ではバナナが一房一ドルで売られていて、休憩をしながらも象と触れ合える機会が設けられていた。象と関係が深いラオスならではの体験が出来た。



コプチャイパーティー

村の人たちからバーシーの儀式をやってもらった後、私たち日本人から「コプチャイパーティー」というものをした。「コプチャイ」とは、ラオス語で「ありがとう」の意味である。まず、代表から、今回の研修のまとめを述べ、その後、各ホームステイごとになって、ステイ先の父と母に、皆で撮った写真を入れた写真立てをプレゼントした。言葉は通じないが、感謝の思いがたくさんこみ上げてきて、抱き合いながら、涙を流した。父と母も涙を流しており、感動の瞬間であった。その後、日本人からお世話になったラオス人（ホームステイ先の家族・村全体の人々・ラオス大学の通訳さん・グローバルディスカバリーの人々を含む）に、感謝の気持ちを込めて、「小さな世界」を歌った。大学での事前の集まりで、村の方々への感謝の気持ちを込めて歌う歌を、「WA」になって踊ろう」と「小さな世界」で迷った。だが、「WA」になって踊ろう」は、良い歌詞であるし、盛

り上がりのある非常に良い曲であるが、「小さな世界」よりは知名度が低いし、最後に感動というよりは、盛り上がりつつ終わってしまうのではないかと考えた。また、「小さな世界」に決定した。また、「小さな世界」は、日本語よりは英語の方が伝わりやすいのではないかと考えたが、日本語の方が本当の気持ちが伝わると思ったし、実際にラオス人は、現地でも、よく日本の歌を日本語で歌ってほしいとお願いされたりすることもあったので、日本語で正解であったと思う。ラオスの子どもは、日本語に興味があるようだ。「小さな世界」は皆知っている曲であるが、この歌を、こんなにもしっかりと意味を知って歌ったのは初めてで、とても感動した。そして私たちが歌ったその後に、ラオスの方々からラオス語で歌をプレゼントしてもらった。何の歌なのかはラオス語なので分からなかったが、村の人たちは皆知っているようで、有名な曲であるのだなと思った。たとえ



それが、ラオス語で歌詞の内容が分からなくても、思いは伝わった。その後、村の人と、学女生みんな写真撮った。この「コプチャイパーティー」で、日本人（私たち学女生）と、ラオス人（ノンカム村の人々）が、改めて一体化したような気がして、とても嬉しかった。

小野田ひかり



INビエンチャン

ビエンチャンでの二日間

ラオス研修の最後の二日間は首都ビエンチャンで過ごした。九月十日、午前十時に日本のNPO法人「ラオスのこども」のラオス部署へ訪問し、講義を受けた。『ラオスのこども』は読み書きの能力や知識の習得、将来の社会的自立を目的とし、本を読む習慣の普及、小学校への図書室の設置、またラオス語の絵本の出版などの活動をしている。講義では活動内容、その成果、またラオスでの教育に関する問題、活動の課題などを聴き、質問もさせていただいた。読書によって改善されたこと、子どもたちの勉強に対する意欲、ラオス人との共同事業をやっていくことの良さや難しさなどもお話ししていただいた。講義のあと、研修メンバーによる各班の調査をするためラオス部署の図書室を利用する子どもたちと協力してもらった。各班とも村で行った調査をしたが、村では得られなかった意見も出た。農村地

区と都心の違いを知ることが出来た。『ラオスのこども』を離れ市内のレストランでの昼食後、午後二時半ごろNPO法人「難民を助ける会（AAR）」へ訪問し講義を受けた。AARでは現在主に障害者支援を行っている。車いすの製造・配布、事業の提供などのお話をしていただいた。事業の提供に関しては、きのこの栽培、なまずの養殖、裁縫や織物の販売によって自ら稼いでもらうというものである。「最初にきつかけを与えるだけで、あとは自助努力で続けてもらう」というのが基本方針だという。講義を通して、援助のあり方や援助をする人に求められる能力、ラオスでの事業の展開のしかたなどのお話を聞いた。午後五時、ホテルに戻り広い部屋で振り返りの会を行った。今回の研修で自分が考えたこと、得たこと、疑問に持ったことなどを共有した。ほぼメンバー全員が発言して、それに対する先生の補足やコメントからまた新たな意見を吸収することが出来た。一時間半ほどの振り返



藤井 さち

りだったが、それぞれ集中してとても良い意見交換が出来た。九月十一日、最終日の午前十時にホテルを出発しブツダパークへ。午後から自主研修で市内を回った。そして夕方ホテルに集合し、空港へ出発した。首都ビエンチャンの滞在は不安もあったが、良い収穫が沢山ある、有意義な最後の二日間となった。



世界遺産

ルアンパバンは、ラオス北部に位置する古都である。一九九五年にはユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された市街地自体が文化遺産としてユネスコの世界遺産（ルアン・パバンの町）に登録されている。伝統的な建造物、都会的建造物、十九世紀から二十世紀の植民地建造物の他に類を見ない優れた融合の代表である。ルアンパバンはラオスの首都ビエンチャンからメコン川を約四〇〇キロメートル上流にさかのぼったカーン川との合流場所に位置する。ルアンパバンのシンボルともいえる寺院、ワット・シエントーン。ルアンパバンにある数多くの寺院の中でもワット・シエントーンの美しさは群を抜いて素晴らしい。一五六〇年に建立されたこの寺院はルアンパバン様式というスタイルで建てられている。湾曲した寺院の屋根は幾重にも重なり、その緩やかな傾斜は優雅で落ち着いた印象を与えている。同時にそ

の特徴的な屋根は物理的工夫も備えているのだ。屋根を地面近くまで長くし、壁の面積をすくなくすることで、寒い時期、メコン川からくる冷たい風を防ぐために工夫を凝らした設計となった。これをルアンパバン様式という。入り口の反対側には「マイ・トーン（黄金の木）」のモザイクが壁一面に描かれている。色とりどりの素朴で微笑ましいモザイクの絵柄だ。仏教の物語が描かれている。寺院の中には、一九六〇年に行われたシーサワンウォン王の葬儀で使われた霊柩車が納められている。霊柩車は大きなドラゴンをモチーフに作られた。メインストリート沿い、ルアンパバン国立博物館前にある小高い山がプーシーの丘だ。ルアンパバン国立博物館前から上る階段は、全部で三二八段。頂上からは町全体が世界遺産に登録されているルアンパバン市内やメコン川とナムカーン川を一望できる。ほぼ三六〇度の展望が可能で、絶景だ。プーシーの丘の頂上で、願い事を言っつて雀を放つと、



その願い事がかなうといわれている。実際の、頂上付近で雀が販売されていた。プーシーの丘の名前の由来は、かつてアマールシーとニョティカ・ルーシーという二人の仙人が神の導きによりたどり着き、ルアンパバンの町を造ったという伝説が残されていることから、「仙人（ルーシー）の山（プー）」と名づけられたと言われている。

根本 真莉絵

ワークショップ班

●目的

当研修は農村に滞在し、「ラオスらしい」生活を体験する中で、ラオスの豊かさや開発について考える。一緒に過ごす中で聞ききれない彼らの生活や考えを知るために私たちはワークショップを企画、実施した。企画の中で私たちは「心の豊かさ」に焦点を当てることにした。

「豊かさ」とはなんだろうか。しばしば、「豊かさ」を測る際には、所得やGDPを用いられることが多い。しかし、日本のように、ただ所得があるからといって本当にその人は「豊かさ」を感じているのか、そして、生活において感じる「豊かさ」と完全に一致するものなのか、という疑問から目に見える経済的な面だけでは「豊かさ」を測ることはできないと推測した。そこで私たちは、「豊かさ」には目に見える「経済的な豊かさ」と、その対照として目に見えない「心の豊かさ」も存在していると仮定した。では、「心の豊かさ」はどのように定義されるのだろうか。私たちは「心の豊かさ」を人との関わりで作り上げることができると考える。人との関わり合いが深いほど、その人自身の「心の豊かさ」は満たされることになるということ



第3章：研究・報告

だ。この仮定のもとワークショップを行い、ノンカム村の「心の豊かさ」を測る。

●テーマ

人との関わりからわかるラオスの心の豊かさ

●対象者

村の小学生、その父親世代、母親世代、祖父世代、祖母世代、高校・大学生世代
(各四人×十グループ 計四〇人)

●村人にとってのメリット

日本との比較から、ラオスのいいところを再確認してもらう。

●ワークショップの内容

一日のタイムスケジュール(その時々で一緒にいる人も記入)十心の豊かさを測るための質問

一、どの時間が幸せか(またそれはなぜか)→マークや順位づけ

二、一人の時間はあるか(幸せか、もしあったら幸せだと思うか)

三、家族でご飯を食べているときに会話はあるか(どんな話か)

四、一日で誰と一番話すか

●進め方

- 一、あらかじめ日本人に調査をしていく
- 二、調査対象者と学女生が、一か所に集まりワークショップ
- 三、発表

ワークショップ班

ワークショップ班のねらいは、ラオス人の心の豊かさを測ることである。日本とラオスで調査を行うが、複数の文献調査から、私たちは日本は経済的豊かさ、ラオスは心の豊かさの割合が大きいと予想した。ワークショップの結果でラオスの方が人との関わりが多く、一人の時間が幸せでないという答えであれば私たちの予想が証明されたということになる。以下、ワークショップ班の活動を報告する。

●日本での事前準備

ワークショップを担当することになって、今回の「ラオスの子どもたちのお手伝いから学べる」というテーマ

に沿って、どのようなワークシヨップをすればよいのか班内で悩んだ。さらに、最初は、ワークシヨップ班内で、意見が全く出ず、悩んだが、段々日を重ねて話し合っていくうちに、班内で打ち解けあつて、皆それぞれ自分の意見を述べられるようになった。そして、自分たちでまとめたワークシヨップの内容を、先生に報告し、話し合いを重ねて、許可が出たときの喜びはとても大きく、話し合ったかいがあつたなと思ひ、それと共に、絶対成功させたいという気持ちが強くなった。

実際のそのワークシヨップの内容として、日本とラオスのそれぞれの年代の一日のタイムスケジュールを比較し、また、心の豊かさを測るための四つの質問をすることで、人との関わり、幸せとは何かを問い詰めた。

説明と練習を兼ねて研修メンバーでワークシヨップのリハーサルを行った。また日本人の父、母、祖父、祖母、小学生、高校生のそれぞれ二、三人ずつに調査をし、ラオス語訳を添えた。

●ノンカム村での実施

午前の子ども班のアクティビティ

ス人が発表した後、日本語で訳してもらった。日本人の調査とは思っていた通りかなり違いがあつたため学女生たちも真剣に聞いていた。しかし、タイムスケジュールを書いてもらう作業でラオス人たちは英語が通じない為かなり時間をかけてしまった。その為、大学生世代のグループしか発表が出来なかった。しかし、発表をしている最中のみならず、笑つてる人もいれば、その時間にそんなことをしているのか?と驚いている人もいた。発表が終わると発表者とラオス人の方に大きな拍手が送られた。最後にワークシヨップのリーダーが今回のワークシヨップを行った理由と、その結果気づいたことをラオス人たちに伝えた。それを聞いたラオス人の人たちは嬉しそうな顔を浮かべていた。

●結果

上段では、普段の生活の流れがわかるようなタイムスケジュールを作成してもらつたが、高校生世代を除くすべての世代においてあまり差のない結果となつた。それに比べ下段の人との関わり

の後、先生やグリーンディスカバリーの方と話し合い、場所の変更や人数の確認を行った。また場所の変更の際、さまざまな年代の方がいたので、子どもを対象にした部屋と大人を対象にした部屋に分け、スムーズにワークシヨップが行える環境を考慮した。しかし、ワークシヨップの開始が午後二時と村の人に伝わるようにしてもらつたが二時になつても現れず、結局二〇分後ぐらいに集まり始めた。ここはラオス人の特徴である、あまり時間に左右はれない性格である。最初は時間通りワークシヨップが行えず、もしかしたら来ないのではないかと不安もあつたが無事に集まつてもらい安心したのである。また、対象の大人の方は呼んでいない方も人伝えによって来てくれて結果一、五倍の人が集まりイスをぎゅうぎゅうに詰めて座つてもらつた。それぞれの世代六人グループになつてもらい学女生二、三人とラオス大の生徒一人付いてもらつた。

ワークシヨップが始まると、大人たちは真剣に私たちの説明を聞いてくれた。説明が終わるとそれぞれタイムスケジュールとその時間誰と過ごして

についての質問では、違いが見られた。結果の中から代表例としてラオスの父親世代と高校生世代の二つを示す。

ラオスの父親世代は、五時に起床し七時まで釣りや畑仕事をやり、七時から朝食をとる。八時から畑仕事に出かけ十二時にはお昼ご飯を食べる。そして十二時半から十八時までまた畑仕事を行い十八時から十九時まで夕食をたべ、十九時から二〇時半まで自由時間、そのあと二〇時半から就寝というタイムスケジュールである。

父親世代											
0	5	7	8	12	12.5	18	19	20.5	24		
睡眠		魚釣り or 畑仕事		畑仕事		夕食自由時間		睡眠			
誰と		一人 or 妻		妻		妻		一人		家族	

ラオスの高校生世代は五時に起床する。五時から六時まで朝食をたべ、六時から十一時半まで自由時間、十一時半から十二時半にお昼ご飯を食べ、十二時半から十六時まで畑や魚を釣

いるかを書いてもらつた。タイムスケジュールを書き終わつたらその一日のタイムスケジュールの中で自分が最も幸せな時間に星印をつけてもらひ、また四つの質問をし、それも含めて記入してもらつた。最後に全体の平均を取り模造紙にラオス語で結果を書いてもらつた。次に幸せな時間を星印を付けてもらつた。私の班はお父さん世代だったが全員一致で朝ごはんの後の時間に皆、星印を付けていた。なぜみんなこんなのか不思議に思つたが「朝ごはんが終わつて一日の始まりを家族揃つてのんびりと食休みを取るのが毎日の日課で一日の始まりなんだ。」と聞いてラオス人の豊かな人柄はこの様なところからきているのかなとちよつとした発見でもあつた。

そして模造紙に書いてもらつた後、ラオス人に発表してもらつた。あまり人前で話したことがない為か、発表を頼むと「え、できないよ」なんて言っていたが、最終的に快く引き受けてくれた。また、せっかく発表をしていても私たち学女生はラオス語で発表されても理解出来ないためラオス大学の方にも発表の際一緒にいてもらひラオ

るなどお手伝いをする。そして十六時から十七時までサッカーをし、十七時から十九時までシャワーを浴びる。十九時から二〇時半に夕飯を食べ、二〇時半から就寝というタイムスケジュールである。

高校生世代											
0	5	6	11.5	12.5	16	17	19	20.5			
睡眠		自由時間		畑仕事 or 魚釣り (お手伝い)		サッカー		夕食		睡眠	
誰と		一人		家族		友達 or 一人		家族		一人	

すべての世代において起床、朝食、昼食、夕食、就寝の五つは共通していた。私たちが各ホームステイで食事をする際に、常に家族がそこにいたが、お客さんがいるからではなく、普段の姿であることが確認できた。食事等を軸に間の時間で何をするかというところにそれぞれの世代の特徴が見られた。例えば父親世代なら上記のとおり仕事、母親世代なら家事、日本とラオスで違いのあつた高校生世代でいうと日本人は学校で

授業、ラオス人は家の手伝いなどである。なお、高校生世代に違いが見られたのは、村に残っているその世代の人は都会の学校に通えていないという事情があるからである。人との関わりに関しては私たちの予想通り、日本人よりラオスの方が人と関わりながら生活している。中でも家族との時間が多い。また社会人や学生の日本人は特に家族との時間が圧倒的に少ないことが明らかになった。

四つの質問に関する結果

(日本)

一、一番幸せなのは趣味、食事、寝るときという答え。

二、一人の時間はあり、その時間を幸せと感じている。

三、食事のときは、その日の出来事について話す。

四、一番話す相手は、父親世代は同僚だがその他は家族の誰かしらと一番話す。

(ラオス)

一、一番幸せなのは寝るとき、夕食など人が集まっている時という答え。

二、一人の時間はあがるが、みんなである

ほうが幸せと感じる。

三、食事のときは、仕事、勉強、子どもの話しをする。

四、一番話す相手は家族全員、家族の誰かしらと一番話す。

質問一は一日の中で最も幸せな時間を聞いているが、日本人もラオス人も食事の時間や睡眠の時間と答えた。日本人は一人で食事をする人も多いが、食事の時間が一番幸せと答えたのは家族や友人と食事をしている人だった。また、日本人にみられた趣味の時間というのは、外出する友人との趣味の場合も家での一人の趣味の場合もあったため、人との関わりに関して一概には言えない。質問二では日本人は一人の時間を幸せと感じているが、ラオス人は一人の時間を幸せとは思っていない。これはホームステイをしてきたからわかることだが、この差はそもそも「一人の時間」の感覚が違うためであると思う。日本人は目的として一人になるが、ラオス人は一人でいる時は単なる状況である。つまり、ラオス人は意識的に一人になるのではなく、基本的には他の人と一緒にいるということである。質問二は初めに述べた私た

ちの予想に近い結果となった。質問三は家族との食事の時間にどんな会話をするかという質問だがこれには違いはなかった。質問四は一日で誰と一番話すかという質問だが家族と一番話すという人がほとんどであった。日本人は外にいる時間が長い割に家族との会話が一番多いという結果だった。これが、「家族と過ごす時間が多いのか」あるいは「人とかかわることが限定的なのか」は今回の調査からはわからなかった。ワークショップと質問の結果からわかったことは、ラオス人が人との関わりが多いということである。これらの結果から、ノンカム村の「心の豊かさ」を測るという私たちのワークショップの目的が達成できた。

●考察

私たち先進国に住む人々はしばしば「豊かさ」の指標として「経済的豊かさ」を用いている。しかし、豊かさは金銭的価値やモノの多さだけで置き換えることができるだろうか。モノが溢れていない経済が発展途上にある開発国は本当に「豊か」ではないのだろうか。私たちは、いろいろな学習をもとに、

「豊かさ」には二種類あると考えた。一つ目は上述したGDPや経済動向によって量る「経済的」な豊かさである。二つ目が、モノや経済発展していなくても人々の心の中に存在している「こころ」の豊かさ。後者について、開発途上国であるラオスの「ノンカム村」でその実状から探ってみた。

村で実施したワークショップを通じて、ノンカム村の人々は積極的な人と関わりあっていることがわかった。たとえば、家族全員で協力して料理を作り、朝、昼、晩とご飯は必ず家族全員で食べていること。一日に最低三回は家族全員が顔を合わせ、コミュニケーションを取る時間がある。日本の家庭では、家族一人ひとりが忙しいため、めったに見られない光景になりつつある。この家族と共有する時間が、ノンカム村の人々の「こころ」をみだしており、人と関わる時間が彼らと村の「豊かさ」につながっていると感じられた。

ノンカム村の人々にとって人と関わることは当たり前であり、その時間が頼みの場となっていると私たちの目にはうつった。彼らの「関わり方」は単に常に一緒にいるだけでなく、助け合っ

たり、温かく見守ったり、しばしば寄り添ったりしていた。誰かが一人で何かをする姿はめったに見られず、自然と人が集まっていた。こうした人との関わり方があるがゆえに、私たちにあっては「助け合い」である行為がノンカム村の人々にとっては生活の一部と化し、誰かに助けを求めることを厭わずに行えるのである。これが安心感や安らぎ、ひいては充足感につながり、私たちが考える「こころ」の豊かさに当てはまると感じた。

家族や近所の人たちと共有する時間は、現代の日本、特に都市部においては年々減ってきているのが現状であり、その結果、「こころ」の豊かさは減少傾向にあるのかもしれない。日本や他の先進国のようにモノが溢れかえっている環境の下での生活はこの「こころ」の豊かさを育むのは極めて難しい。なぜならば、先進国の人々は人と関わりなくとも便利で快適な生活が送れるようになってしまったからである。人と関わる時間が減るということは、コミュニケーションを取る時間が少なくなり、人との関わり方が分からなくなる。そうすると、さらに、人との交流が億劫

になり、孤立化がどんどん進んでいくのが今日の日本なのかもしれない。「経済的」豊かさ、「こころ」の豊かさに優劣を決めることは不可能だが、日々の生活を円滑に進めていくためには「こころ」の豊かさを大切にすべきであると、ラオス・ノンカム村でのワークショップを通じて、私たちなりの答えを導き出した。

●ワークショップを実施してみても

ワークショップで、私たちが求めようとしていたことは「心の豊かさ」を測ることだ。目で見えることも定義することも難しい「心の豊かさ」を表すワークショップを考え出すことは非常に難しかった。また、ワークショップを行う上で自分たちだけでなく、村の人々にもメリットがあるように配慮することにも頭を悩ませた。なぜなら、ラオス人と日本人の感覚、または生活スタイルは異なるものであるからだ。そのため、できるだけ違和感なくラオスのいい所を確認してもらうことに苦戦した。だが、度重なる話し合いと検討の結果、タイムスケジュールというラオス人にも直観的に把握できる形でワークショップ

開発教育 (KK)

を完成させることができた。

当日、思っていたより多くの人が集まってきた。あらかじめ伝えていた人数の違いや年代の違い、これらはある程度覚悟していたが私たちは混乱してしまっただけで、小学生には調査することができなかった。ワークショップの説明を通訳の方を通して行ってもらったが、みんな十分に理解できていない様子であり、また、ラオス大学の子達にも当日の説明だけで協力してもらったため、理解に時間がかかってしまった。改めて情報共有の不足、コミュニケーションの不足があったと反省している。もっと前もって通訳の方々やラオス大学の子達を交えて情報共有をし、お互いの理解を深め、打ち合わせを行えばもっとスムーズに行うことができたであろう。そして、私たちが盲点であったことが一つあった。それは、年配の女性が文字を書くことができないということだ。そのため、祖母世代グループが他に遅れを取ってしまった。ラオスの年配の女性にとっては非常にあり得ることなのに、全く頭に入れていなかった。臨機応変に対応できたものの、

もっと詰めて考えていけば、初めから工夫することができたかもしれない。具合の悪くなるような熱気に包まれた狭い教室の中、学女生のみんなを始め、通訳の方々、ラオス大学の子達、そして村の人々みんなが協力的に参加してくれたおかげで、大幅な変更があったにも関わらず結果として最後までやり遂げることができた。

●おわりに

今回私たちはワークショップ班として六人で約五ヵ月間活動してきた。中々予定や時間が合わず直接話し合えた時間は少なかったが、多くの意見が出たことで選択肢が広がり、私たちにできる一番いいものを創り上げられたと思う。こう言い切れるのは伊藤先生のお力添えのおかげである。先生との話し合いはとても緊張したが、先生は私たちの考えを尊重したうえで様々な角度から注意点や問題点を指摘、アドバイスしてくださった。たくさん新しい視点に気づかせていただけたことでワークショップの内容を確立することができた。

現地ではグリーンディスカバリー、

LJC、サノンさん、ポークイさん、対象者の村の方々に大変お世話になった。グリーンディスカバリーは調査対象者と場所の手配、LJCとサノンさん、ポークイさんにはワークショップでの通訳をお願いしたが、難しい内容であったにもかかわらず正確に調査することができた。そして村の人々は学校の一室で蒸し暑い中、集中して順序良くワークショップを行ってくれた。最後の発表やまとめもしっかりと聞いてくれ本当によかった。ラオスと日本の比較から、村の暮らしの良い部分に改めて気づいてもらえたと思う。

担当者:

市川美華、小野田ひかり、金智美、鈴木笙子(リーダー)、永井詩織、丸山実可子

●開発教育とは

ラオス研修では、ラオスから帰国後東京・千葉、埼玉の中学校、高校で「開発教育」プログラムを実施している。開発教育とは私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらった教育活動である。貧困・飢餓、紛争・戦争、環境破壊、人権侵害といった地球規模の問題が、日本の社会のあり方や私たちのライフスタイルとも深く関係しており、こうした問題をよく知り、自分の問題として考え、その解決に向けて行動していくための参加型学習のことである。

ラオス研修における開発教育では、「問題」に必ずしも着眼していない。反対に開発途上国の「豊かさ」「良さ」「その国らしさ」といった点に注目し、それらから私たちが何を学べるかを考えることを大切にしている。研修に参加した学生がしばしば「人間関係の

つながりの深さ」や「ラオスの活力」など、現地での調査や体験から「ラオスならではの豊かさ」を発見している。このような、ラオスを訪れたからこそ得た学びを元に、開発途上国について「もっと知りたい」と思うきっかけや、私たちの日本での生活について見直し考え、行動に移していくきっかけになるような授業を中高生向けに実施していく。

●テーマ

例年、ラオス研修に参加した学生は訪れる村の「コミュニティの豊かさ」について感銘を受けている。たとえば、家族で食事をしたり、家に家族以外の人が出入りしたり、外では人が共に作業をしたり、話したりする姿が当たり前のように村ではある。それがなんと心地よく、「豊かに」感じるのである。OECDの「better life index」(OECD HP参照)によると「他人と頻繁につながっていることや、人間関係の質は私たちの幸福の決定的要素である」と述べられていた。つまり、

「人とのつながり」というのは豊かさの一要因である。二〇一一年の東日本大震災以降、日本でも「つながり」の大切さが認識され、語られる場面は多くなっている。このようなことから、今年度のテーマである「豊かさ」を「人とのつながり」から考えるために、「人とのつながりの大切さ」について開発教育を行うことに決めた。

●つながりとは

日本では一般的に「人とのつながり」が持てる場として町内会・学校・ボランティア活動などがあげられ、また最近では、家族間のつながりのあり方も注目を集めている。では、この「つながり」とは何か。ラオスに行き、そこの学びを元に開発教育実施するにあたり、「人とのつながり」を、人と何かを共有すること・コミュニケーションをとること・助け合うこと・思いやりを持つ、と定義した。

その理由として、まず、「人と人とのつながり(絆)に関する調査」(連合日本労働区網連合会HP)では、子ども・

配偶者・両親とのつながりを「大切に思う」と答えた割合は約八割以上という結果だった。子どもや配偶者とのコミュニケーションを「とっている」と回答した割合は約九割にも上った。また、家族とのつながりがある人ほど精神的なやすらぎを得られ、家族内で精神的なやすらぎを感じている人ほど会話の頻度が高いという結果でもあった。このことから、コミュニケーションをとることが人とのつながりの構築に結びついているということができる。一方でコミュニケーションをとっていない、またはとれない理由として「行動や活動の時間が合わない」「仕事が忙しい」などが挙げられており、コミュニケーションを取るためには同じ時間を共有することが必要であることが分かった。

また「助け合い・思いやり」に関しては「地域のつながりの希薄化をもたらした要因」（内閣府HP参照）に関わる調査で、NPOやボランティア活動に参加したいと考えている人は地域への貢献意識がある、という報告が

されている。つまり、なにかを貢献したいという「助け合い」「思いやり」の意識を持つ人は、人と関われる場所（NPOやボランティア）、つまり、人とつながれる機会を求めている。これらの調査結果から「人とのつながり」は人と何かを共有すること・コミュニケーション・助け合い・思いやりが関係していると考えられる。

●つながりと「お手伝い」

家族間や地域社会で多様なつながりが存在しているが、今回は全体のテーマである、お手伝いを「人とのつながり」を測る要因とした。山口県地域家庭教育推進協議会によると、保護者が期待している、実感したお手伝いの効果として「思いやる気持ちが育つ」「家族の一員として自覚がもてる（一緒に生活しているという自覚）」「兄弟で協力するようになる」「会話が增える」などが挙げられ、私たちが定義した人とのつながりの要因としてお手伝いが含まれることが分かった。このような調査結果を参考に、スズで

は①どんなお手伝いがより人とのつながりを持てる良いお手伝いなのか。②なぜラオスのお手伝いが良いのか（ラオスのお手伝いが日本よりも良いと仮定する）を調査することによりラオス人の人とのつながりを考える。

●現地での調査

現地では二種類の調査を行った。

I. 母親への調査で「なぜ子どもにお手伝いをさせるのか？」では、日本では保護者が期待、実感している効果として人とのつながりの要因があげられているが、ラオスでも実際お手伝いから人とのつながりの効果を実感しているのかを調べることを意図とした。II. 子どもたちへの調査では、「お手伝いの回数・お手伝いは楽しいか・自分からお手伝いをするか・お手伝いの種類・誰とお手伝いをするか」というアンケートの実施。子どもたちのお手伝いの現状を調べることによりラオスのお手伝いの特徴を把握することを意図している。また同様に首都ビエンチャンにある日本のNPO法人

『ラオスのこども』のラオス事務所に併設される図書館に訪れる子どもたちにも村の子どもたちと同じ質問を行った。

I. 母親への調査

村で十五人の母親に調査し、ほとんどの母親が自分だけでは手が回らないから、忙しいから手伝ってもらうと答えていた。つまりラオスでは「必要性」によりお手伝いを頼んでいた。この回答は意外だった。日本では、もちろん必要性からお手伝いする、してもらうこともある。しかし、しばしば、子どもに何かしら意図して「お手伝い」を頼んでいることも少なくない。また、学校の夏休み期間は、学校からの夏休みの過ごし方の中に「家でお手伝いをする」という項目もある。

ラオスでの「必要性」から生じているお手伝いで気が付いたことがある。助けが必要な時、身近にいる人に頼むと以外の手段がないと、日常生活で「頼むこと」「お願いすること」が当た

り前となる。結果、遠慮、躊躇なく人に頼める、そこに「つながり」ができる。この当たり前なことの発見、認識により私たち日本人の、人に何かを頼むのに躊躇することに気が付いた。日本の母親は普段何か人に頼みごとするのめ気遣いなどからも躊躇することが多い。一方ラオス人は多くの人がお互い様という考えが強く頼り合える。頼り合えることはお手伝いというとお手伝いの回数増加にもつながり、より緊密なつながりになると考えた。

II. 子どもへの調査

①お手伝いの回数

ラオスの子どもは毎日お手伝いをする子が一番多く、毎日決まったお手伝いがある子どもが多かった。↓ラオスの方が日本よりも人とのつながりを作る機会が多い。

②お手伝いは楽しいか

日本の子どもは六三%の子どもがお手伝い楽しいと感じているのに対してラオスの子どもは田舎、都会関係なくほぼ全員が楽しいと答えた。

↓ラオスの子どもは遊び感覚から楽しくお手伝いをしている。自発的になってゆく。

③自分からお手伝いをするか

日本の子どもはお手伝いを自分からする子が半数なのに対して、ラオスでは七割近くの子どもの自分からお手伝いをしていた。

↓お手伝いを自発的、自主的に行っている。当たり前のように行う。

④お手伝いの種類

日本の子どもは食器の準備片づけ・靴をそろえる・机まわりの掃除・洗濯物をたたむが多いのに対してラオスの村の子どもは掃除・家畜のえさやり・こはんの準備片づけ（料理も含む）・水汲みが多かった。ピエンチャンの子どもは日本の子どもよりの回答だった。

↓ラオスの方が難しいお手伝いを任されていてより家族の一員として自覚がもて、助け合いが生まれる。しかしピエンチャンの子どもは村の子どもよりは簡単な（重要でない）お手伝いをしていて都心にな

JICA グローバル教育コンクール

ると他にやることがあったり（塾など）、家族で一緒にいる時間が少なくなることからお手伝いの難易度が低くなると考える。

⑤ 誰とお手伝いをするか

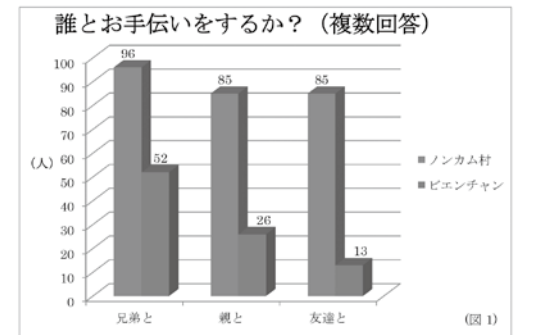
日本では一人でやる人が多いのに対しラオスでは村でも都市でも一人でお手伝いをする子どもは少なかった。

↓お手伝いすることによりラオスでは時間の共有が作られている。

また、村と都市を比較したときに都市では友達とお手伝いをする人の数が減っていた。（図1参照）

↓村では生活範囲が村全体なのに対し都市では家族に狭まることになった。

以上のことから、お手伝いをする回数が多く、楽しんで自らやり、より難しい重要なことを誰かと一緒にやるお手伝いがより人とのつながりにつながる。そして私たちの調査から、ラオスの子どもはお手伝いを楽しく、自ら率先して、お母さんのために行って



いる、そしてお手伝いという何かを頼むことにおいてラオスでは頼みやすい関係ができていたことがラオスのお手伝いの良さと考えた。

● おわりに

では、日本ではラオスのような人とのつながりやお手伝いができるのだろうか。ラオスでは「必要性」から母親は子どもにお手伝いを頼んでいた。頼みたいから頼むラオスと違い、日本人の、人に頼みごとをするのに躊躇してしまうというのは、良くも悪くも日

本人の気質なのだろう。また、都市化し、発展していくと家族一人一人が忙しかったり、異なる場所での過ごす時間が長く、村のような生活やお手伝いをするのは難しいだろう。しかし、お手伝いを、家族で時間の共有ができる場づくりと考え、一緒に行う。人に頼みごとをしてもらえるように、相手に頼んでいいと思ってもらえるように、まずは自分から何か頼みごとをしてみる。日本ならではの幅広く作れるネットワークを活かして様々な人とのつながりを持つてみる。このように日本でも方法は違っても人とのつながりを築いていく方法はあるのではないかと。私たちKKは、帰国してこれから、中高生と一緒に開発教育の場でラオスのお手伝いから私たちの日本の生活について見直し考え、自ら行動に移していけるような働きかけをしていきたい。

担当者:

大曾根優衣・小川杏奈・藤井さち

星川亜紗美・村田瑛美子

二、部門

今年度のラオス研修では事後活動として、今までの活動に加えて、JICAグローバル教育コンクールへの応募を考えている。

まずJICAグローバル教育コンクールについてである。

一、概要

世界が抱える様々な問題を自分たちの問題として考え、その解決のために自ら行動に移すことのできる人は、グローバル化が進む昨今、社会でますます必要とされている。そのような人を育成するために、グローバルな視点をもった教育（グローバル教育）の必要性が謳われている。こうしたグローバル教育を実践する際に活用できる作品のコンクールをJICAでは行っている。

「写真」部門：世界が抱える様々な問題（教育、保健医療、環境、水資源、防災、農村開発、平和構築等）について学ぶことができる写真や、日本の国際協力現場や開発途上国の現状を知るきっかけとなる写真に、メッセージを加えた作品。

「グローバル教育取り組み」部門：グローバル教育の実践事例などを募集。学校での教育実践、クラブ活動や生徒会活動、個人での活動など。

三、応募規定

・両部門共通：応募用紙記入（作品を通じて伝えたいことの概要など）

・「写真」部門：1作品につき写真8枚以内 ※一枚から応募可能

写真に加え、写真を通して伝えたいこと（写真の説明・メッセージ等）を記載する。

・「グローバル教育取り組み」部門：指定の様式（ワードファイル）

ラオス研修からの参加は今回が初めてということだからということも多いが、受賞を目指してこれから作り上げていきたいと思う。

担当者:

久保結奈・鈴木笠子・大曾根優衣

研修を振り返って

研修を振り返ってみて、この研修に参加してよかったと心の底から思えた。最初はただ授業の一環として参加するという考え方だったが、ラオスに直接行き、自分の目で見て、体験することによって考え方や受け入れ方が変わっていったのが自分でもわかった。そして何よりもラオスという国の持つ良さを、この研修で知れたことがとてもうれしかった。ラオスという国はこの授業をきっかけに知ることになった。最初はだれもが「ラオス？どこ？」と首をかしげるだろう。私もその一人であった。そして日本にいる間の三ヶ月半、ラオスについてではなく、「貧困」「開発」などといった基本的な支援のありかたなどを学ぶ日々だった。そして授業内容についての多くの課題はつきものであった。また、出発の日が近くなるにつれ、子ども班、ワークシヨップ班、KK班などすべてのグループが

課題などで忙しい中、一生懸命準備をし、発表しあい、意見を出し合うなどしてより完璧にしようという心がけていた。とても長い時間飛行機、バス、ボートを乗り、移動の末到着した村では、驚きの連続であった。ある程度自分の中で予想はしていたにも関わらず、驚きが隠せなかった。自分で水を汲んで流すトイレ、ためてある冷たい水でのシャワー、暗闇を照らすとても小さい電球とロウソク、そして食事を手で食べる文化など数えきれないほどいろいろなことが心配と戸惑いがあった。しかしそんな心配もすぐに消えていくくらい、すぐ村に溶け込み慣れることができた。日本の生活とは全然違うけれど、それでも生活していくのに不自由はないということに村の人々に気づかせてもらった。そして一番心配だったコミュニケーションの方法、村に来てやつとラオランチの時間の大切さを分

金智美

かったのだ。しかしマピーマピー（おいでおいで）から仲良くなった子どもたちとは完璧に意思疎通はできないものの、お互い理解しあおうと努力したり、ジェスチャーなど使い遊んだりしている間、いつの間にか言語の壁はなくなっていたことに気づいた。三泊四日と短い間であったが、私たちが家族の一員のように受け入れてくれたボー（父）とメー（母）や村の人々たちと別れるとき、泣いている自分がいて、その時、心の底からみんなにまた会いたいと思った。この研修で学んだことや、見たこと、感じたことそして出会った人々を忘れず、これからもこういった経験や出会いを大切にしていきたいと思っている。そしてこの研修を機に自分をもっと発展させていこうと思った。

個人感想

石渡利奈

私は九日間ラオス国際協力研修に参加した。「豊かさ再考」ラオスの子どもたちのお手伝いから学べること」——という研修のテーマに根付いて人と人の関わり大切さを考えることができた。私は村での滞在の際、五歳の子どもが刃物を持ってご飯の材料を刈るお手伝いをしているのを見た。日本では小さい子どもにも刃物を持たせることでさえためらいがあるのにも関わらず、子どもが刃物を使っていることに驚いた。しかしその子どものお母さんに訊ねると、自給自足で生活する村での子どもは生きるすべを教えているということに気づいた。したがって、子どもは自立心を高め、自分で何でもすることが当然と考えられるようになるだろう。このことは、日本では欠けているラオスの豊かさだと思うので、このような教育を実践すべ

きだと感じた。この研修を契機に、人々の支え合いを感じることができた。

市川美華

ラオス人はとてもシャイで打ち解けるまでに少し時間はかかったが、ノンカム村での生活は想像していたよりもストレス・コトバの壁を感じる瞬間は少なく、食事はとてもおいしかったりと快適に過ごすことができた。一緒に遊ぶとすぐに私の体力がなくなってしまうほど子どもたちはとてもパワフルで、その時のきらきらとした笑顔が印象的だった。携帯電話やゲームなど便利機器がない方が想像力が掻き立てられ、さらに人との付き合い方が自然と身に付けられると感じた。人との関わりが希薄になっている今、改めて、家族、友達、その他の人との関係について今一度考え直し、行動に移す必要があると考えた。

大曾根優衣

二年前にラオス研修に初めて参加し、ラオスの変わった、また、変わらない様子を再び研修に参加して、感じることもできた。二年前のノンカム村には、テレビや携帯電話はほとんど浸透していなかった。しかし、今回訪れると、電子機器を持つ人が以前より増え、自給自足の生活スタイルは変わらないものの、刺激を与えるものが増えたように感じる。それでも二年前と同様にノンカム村の人々の心の豊かさを感じたのは、経済的にけして豊かでないとしても、家族で、あるいは家族を越え、村全体が協力しあっているからだ。気が付くと、帰ったらお隣さんにお土産を渡しに行こうかな、と思っていた自分は、ラオスの人の近所づきあいに刺激されたのだろう。

大野夏菜

ラオスに行くことが決まってから私は常に不安であった。もっとも不安であったのは先進国で暮らす私が、ラオスの環境に適応できるかということであった。ラオスは確かに日本と比べると利便性に欠ける。しかし、ホームステイを通していろいろなことを学んだ。ノンカム村には日本には無いものがあつた。村では村人たちが互いに協力し合っていた。彼らは見返りを求めているわけではなく、ただ当たり前のようにそれをしていた。村人全員がまるで家族のようで、心の豊かさを感じた。物があるということが豊かさであるということに直結するわけではないことに気付かされた。ラオス研修は私に、豊かさについての考え方を見直す機会を与えてくれた。

小川 杏奈

ラオスを訪れたのは二回目だった。前回の研修を終えたときに「人のつながり」というラオスの良さは体感できたが、それを言葉にして他人に伝えることが出来なかった。そこで今回はそれを成し遂げようと思い参加した。ラオスに到着して感じたのは経済的な発展が進んでいるということだった。都市部はもちろん、ホームステイした村でさえも前回とは異なっていた。人間関係も変化してしまったのではないかと不安になったが三日間過ごして感じたのはやはり変化がなく、村人同士が家族のように助け合って生きる生活が心地よいということであつた。そう感じたのは生きていくうえで必要なことであるからだと思う。これを軸にこれから行う中高生への授業を作っていきたい。

小川 里彩

行く前の段階では、正直、村での生活にとっても不安を抱いていたが、実際にノンカム村でのホームステイを体験してみると、すぐに不安も取り消されて、心身ともに充実感で満たされた生活だったと思う。生活における最低限のものがあつて、自然の中で子どもは伸び伸びと外で体を動かして遊び、畑や川から食材を自分の手でとって、家族で食卓を囲んで、まさに家族団らんで、そこには家族の温かさを感じた。また、村全体が家族のように接していて、人との心理的距離が近いのに、嫌ではないというその状況がとても居心地がよかった。日本では、家族と近い状況でなかったり、家族の団らんが減ってきていたりするため、尚更そう感じたのかもしれないが、ラオス全体として家族を大切にしている強い力があるため、これから発展していったと

しても、私が感じた居心地の良さや温かさは残るであろうと信じている。また、ラオスの人々の自然体なところや笑顔がこのままずっと続いてほしいと思う。同時に、私も家族への思いや人とのつながりをもっと大切にしていこうと改めて思い、ある環境に感謝したい。

小野田 ひかり

今回初めてこのような研修に参加をしてみて、思うこと、感じることは沢山あつた。初め、「ラオス」という国は、発展途上国で何もない国であると思っていたが、実際に行ってみて、確かにラオスは何もないけれども、欲しいものは全部あると分かった。また、ラオスと日本を比較すると、まずラオスには争いがない。小さなことで争いが起きる日本を恥ずかしく思う。また、ラオスの人々は、自分の国のこ

とを、沢山知っている。現在の日本人は、日本のことを、外国人にしっかりと紹介が出来るのだろうか。とても素直で素直な笑顔をするラオスの人々のお陰で、私も心がきれいになった。子どもたちは、年下であるが、私たちより何倍も大人であると思った。

金子ひかり

この研修で、村での生活を通して、またラオスの子どもや難民を助ける会の方の話を聞いて、私が持ったラオスのイメージは争いを嫌う国であるということだ。村で三泊四日滞在した中では喧嘩をしている人を見たことがないし、子どもに対してしかる時でさえ諭すように話しかけているように思えた。また、子ども同士の喧嘩も親子喧嘩もみかけなかった。この許しあつて生活するスタイルが、協力して家庭の仕事をすること手伝い

につながるのではないかと思った。不安だった途上国での生活も終わってみれば楽しかった思い出ばかりで、それだけではなく、多くの刺激を受け、さまざまなことを考えた貴重な九日間だったと思う。

金 智美

ラオスに行ってきた、ほんとこの国際協力研修に参加してよかったと心の底から思った。行く前は期待もあったが不安のほうが特に大きかった。だが、いざラオスに行ってみると、すべてが新鮮で楽しく、初めての体験ばかりであつた。特に村でのホームステイは私にとって忘れられない大切な体験になった。言葉も通じず文化も違い、最初は途方に暮れていたが、お互い理解しようと努力し、学ぼうという姿勢があれば壁はないと感じた。そしてALCやAARでの講義を聞いて、

将来自分がやりたいことへの確信をもて、そのためにはこれから何をすべきか真剣に考える機会を得ることができた。これからまた機会があれば、ラオスにもう一度行きたいと思った。

久保 結奈

ラオスに渡航する前に事前学習や数回の講義を受け自分の中でラオスのイメージが膨らんでいた。実際にラオスに行ってみてイメージ通りであったりそうでなかったり。ラオス滞在中に一番印象深いのがノンカム村でのホームステイである。実際に子どもたちと一緒に家のお手伝いをし、お手伝いすることによって何をするにも一つ一つそのプロセスが見えることにラオスの良さがあるのではないかと感じた。村で生活していくなかで村人の家の壁を越えた交流が数多く見られ人との繋がりが深いと感じ、

またその繋がりを大切にしている印象を受けた。日本から来た私達を快く受け入れてくれ家族同様に扱ってくれたことを嬉しく思う。彼らの優しい笑顔を忘れることはないだろう。

佐藤 由理

ラオスでの生活は日本とはなにもかも違うだろうと行く前に覚悟していたが、実際に行ってみると村での暮らしは暖かい寝床や、美味しいご飯、身体を清潔に保てる環境（水浴びではあるが）があり、いたって普通の生活であった。日本の都会の生活との違いは、いつも村に暖かい和やかな雰囲気の流れていることだった。村のいろんな場所でいろんな人が集って楽しそうにしている、村人達は支え合って自給自足の生活をしていた。また私は村で、誰かと一緒にお手伝いをするのがコミュニケーションの場にな

ることを体感したので、日本ではどんなに忙しくても家族とお手伝いを一緒にしようと思った。

鈴木 笙子

ラオス研修は今回二回目の参加だった。一回目は二年前、一年生の時。二年前は先輩の指示に従っていただけだった。今回は二年前よりレベルアップを目指し、また同じワークショップ班を選んでリーダーを務めることになった。リーダーという責任と、一から自分たちで考えなければならぬ難しさから、常に心のどこかに焦りがあった。だが村でのワークショップを終えた今、二年前の何倍もの達成感、満足感、自信を感じている。まだ実感はないが、きっと同じように何倍も成長していると思う。今回の研修で得たものはそれだけではない。二年前は漠然としていたラオスの魅力

が、今回ようやくはっきりしたのである。私が感じるラオスの魅力は「ラオスにはなにもない。でも人としてほしいものはすべてある」というところである。伝えたいのに言葉にできないもどかしさから解放された。これからは自信を持ってこの研修のこと、ラオスの魅力を伝えていきたいと思う。この素晴らしい研修に二回も参加でき、本当に充実した大学生生活だと思う。今の私の半分はラオス研修でできていると言っても過言ではないくらい私の人生で大切な経験である。今回関わってくれた方々に心から感謝している。コブチャイライライ!!

鈴木 のぞみ

今回のラオス研修で一番印象に残っているのは、やはりノンカム村でのホームステイである。電気は必要最低限、温かいシャワーはない、お

店もない。ないばかりの村での生活は、ものであふれている日本で生活している自分にとって楽なものではなかったが、非常に充実した時間を過ごした。それも話す言葉や価値観の違う私達を笑顔で温かく迎えてくださったノンカム村の人々の優しさのおかげだ。何があっても何がないのか。うつすらつかめたような気がした。このうつすらした気持ちを言葉にできるようにしたい。もっと自分のできることを探したい。目の前のことを一生懸命頑張ろう。そう思うきっかけをラオスにもらった気がした九日間だった。

中西 花穂

国際協力研修に今回、初めて参加したがとても充実した有意義な研修だったと感じた。私自身、特に「貧しさ」や「豊かさ」について考えさせら

れた研修だった。事前研修では最初に「貧困」についてワークショップを行い、各々が考える貧困について話し合ったがラオス渡航前と渡航後のイメージが私自身とても変わった。発展途上国だからといって貧しいとは限らないことがこのラオス研修で気づくことが出来て本当に良かった。また研修中、先輩達のお互いが声を掛け合って話を進める姿がとても印象的だった。このラオス研修で学科・学年を越えて国際協力について話し合えてとてもいい経験になったのでこの研修で得た経験を私だけにとどまらず様々な方と共有し話したいと思う。

中丸 紗恵

私は今回の研修で、ノンカム村の人達に日本にはない新しい「豊かさ」を教えてもらった。最初は村での生活に

抵抗があったが、すぐに慣れることができた。それは、ホストファミリーのポーとメー、子どもたち、近所の人達がよ者の私たちに暖かく接してくれたからだと思う。通訳を通してポーとメーと食事の時、たわいもない会話で盛り上がった時は本当の家族のようだったと思う。そして、私は一人でいた時間がほとんど無かった。日本では一人でいる時間が長い分、とても新鮮だった。ノンカム村には水も電気も物も最低限しかないけど、その中には人と人とのつながりの「豊かさ」を感じさせてくれる環境があった。しかし、これから経済発展をしていき、ケータイやテレビがこの村にもっと普及していったらこの村の良いところが失われてしまうのではないかと思い、少し悲しかった。この村がこの村のアイデンティを残したまま発展していつてくれることを願っている。この研修で得たことをこれからの大学生活に

活かしていけたらいいと思う。この支えてくれたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいである。

永井詩織

私は今回、初めてラオス研修に行かせてもらい行くまでは食事が口に合いかやホームステイ先の家族と上手くやっていけるかなど不安を抱えていた。しかし行って感じたことは、人も温かく、知恵を使って生活を送っていた。料理も食材も家も自分達で作ったものを自分達で食べ、生活を送っていた。そこには無駄なものが一つもなく人間としての根源だと感じた。たった三日間の村での滞在だったが最終日はホームステイしたお母さんも涙を流して別れを悲しんでくれて、自分達を本物の子どもとして家族として向かい入れてくれたことが心から嬉しく思ったし、人との繋がりをもっと

大切にしたいと思った。

根本真莉絵

今回の研修では、さまざまな角度からラオスをみることができた。それは事前準備があつてベースを築くことでみえるラオスだと思う。九日間の滞在で表面しかラオスを知ることとはできなかったとしても、それは私にとつてのラオスであることは間違いないと思う。私にとつての「豊かさ」の基準や考え方も一八〇度変わった。日本で生活していると、経済面や利便さ、物があることが豊かさだと固定概念に縛られがちだ。実際の村では、経済的には決して豊かではないかもしれない。しかし、それ以上に人の繋がりが、家族愛、人々の思考が、とても豊かだと感じた。ものがある、ないが豊かさを決める基準ではない。村人から、自給自足によって生きる

ことで「生きる力」を教えてもらった。今後、確実にラオスは変化していく。その変化とともに、私たちにない「豊かさ」を失ってしまうのだろうか。変わらないで欲しいと思うのは、私だけではないはずだ。

半沢里美

今回の研修を通したラオスの印象は、穏やかでストレスのない国。九日という短い渡航期間の中で感じたラオスはほんの一部にすぎないかもしれない。しかし、村でのホームステイ等を通して、ラオス人と日本人の時間的感覚やライフスタイルの違いを知る中で感じたことである。ラオスと日本の生活は全く異なるモノであるし、どちらが良いなど優劣をつけるものではないと思う。しかし、私自身ラオスのライフスタイルに魅力を感じるとともに、日本がラオスから学べるこ

とも多いと思った。そしてラオスには魅力的な部分を残しつつ、これからも発展していったほしいと感じた。このような貴重な学びの場を与えてくれた方々に感謝をし、そしてこれから自分自身の成長の糧にしていきたい。

藤井さち

私は今回のラオス研修に参加して、これからの生活に生かすべきことを沢山得ることができた。研修のテーマである「豊かさ」とは経済の発展やモノが沢山あることだけではない。地域のコミュニティの繋がりがりや他者と共有する気持ちなど近年日本では希薄化していることがラオスでは至る所に存在している。幸せだと実感して暮らしていくために、人間として本当に必要な「豊かさ」を知ることができた。ラオスの食事は香草が沢山使われていてパンチの利いた料理が多かった

が、どれも美味しく食べることができた。何より、ラオスの人々の優しさや寛大さにとても感動した。沢山の人の出会い時間を共有することが出来て本当に良かった。

古谷理恵

ラオスへ行く前に私が考えていた事として、後開発途上国に分類されるラオスは貧しさしか無いのだろうか。村の生活は不便なのか。都市（ビエンチャン）と村での相違はどんなところか、といった事があげられた。ラオスへ行ってみて、自分の中での疑問と答え、発見を見つけていった。村の生活は暮らしていく中で必要なものが備わっていた。三日泊まっただけが、不便と感じた事は無かった。村で鶏肉を食べる為に、鶏を殺して羽をむしる光景を見た体験は、日本で生活している時には考える事も無かった生

活の根本を見させてもらった。都市では一般的な家よりもビルやホテルが多かったが、村では家同士が仲良く、知らない人が夕飯に来ることもあった。研修のテーマである子どもたちのお手伝いは、日本に比べラオスの子どもは親の助けとなれるよう積極的にお手伝いをしている事も分かった。自分にとって有意義な研修となり良かった。

星川 亜紗美

二年前、この研修に参加し人とのつながりの豊かさにひかれていった。今回はさらに深く、ラオスの豊かさを探しにいった。メンバーと切磋琢磨し事前準備をし、いざステイ先のノンカム村へと向かったが、現地ではうまくいかないことも多かった。二年前頑張っている先輩方の姿を尊敬し、自分もそんな風になりたいと頑張っていた。

ただけに悔しい思いはとてもあったが、自分がこれから成長するのにもいい機会になった。そして、一・二年生たちがこの研修での経験や先輩の姿をみてなにか感じ自分たちでこの研修を作っていくてくれるのではないかと感じ嬉しかった。東京にはコミュニティのつながりは作りづらいが、この研修で築ける、都会ならではの人のつながりの形もあるのではないかと今回感じた。

丸山 実可子

九日間のラオス研修、特に四日間のノンカム村での生活は私にとって非常に濃い毎日で、学ぶことの多い毎日であった。渡航前の事前準備は、なかなか良い案が出ず、何回も何回も話し合いを行って大変であったが、結果として無事にワークシヨップを終えることができた非常に良かった。この研修

で子どものお手伝いの様子やラオス人の温かさ、ラオス人特有の気質に触れ、私たちが求めていた本当の「豊かさ」の答えのヒントを得ることができたことは、私のこれからの学習に大きく繋がるであろう。また、豊かさや開発といったことだけでなく、今後の大学生生活や将来について考えるきっかけをもらった研修でもあった。本当に研修に参加してよかったと思う。

三輪 玲菜

多くの人に支えられて充実した研修にすることができた、今回私が一番感じたことはそんな感謝の気持ちを忘れない大切さだ。まず村のホストファミリーは、私達をお客ではなく本当の家族のように迎えてくれ、お手伝いもたくさんさせていただいた。子ども班のアクティビティや調査に快く参加してくれた村の方々には、感謝

の気持ちを最後のパーティーで伝えることができて嬉しくて感動した。またGreenDiscoveryの方やLJCの学生さんたちのおかげで言語の壁を感じることなかった、送り出してくれた両親のおかげで研修に参加できた。たくさんの「おかげで」が詰まった研修だった。私はそのほんの少しのお返しとして、KKなどの活動を通してラオスと日本の交流の懸け橋になりたいと思った。

村田 瑛美子

今回の研修で最も印象に残っているのはノンカム村での生活を通し、人の温かさやコミュニティの強さを実感したことである。ホームステイを終えルアンパバンに戻って来た時に何か物足りなさを感じ、人々のつながりや関わりの大切さを知った。私たちの生活はモノにあふれ便利な暮らしで

あるが、それは豊かなのか。ラオスは発展途上国だから貧しいのか。事前研修で豊かさを測る指標は様々であるを知った。ホームステイ先では一つのテーブルを囲み、朝昼夜ご飯を共に過ごした。日本では家族と過ごす時間はあまりなく、ご飯を一緒に食べることが新鮮で嬉しかった。家にいれば窓から近所の子どもたちが覗いていたり、家に入ってきて一緒にご飯の準備をしたり、村全体が家族のような、一つのコミュニティであった。モノの豊かさが進めば人々のつながりは希薄してしまうかもしれない。しかしノンカム村の人々が持つ、豊かさは大切に残していったほしい。日本でもノンカム村のようなコミュニティの大切さを再認識していけるよう、開発教育で発信していきたい。

吉田 千織

今回私はラオスに行くのも初めてで、海外自体も十年ぶりであり、全てのことが新鮮だった。一人でラオスに渡航し、ボランティア、研修と二十三日間ラオスに滞在する中で一番感じたことは、ラオスの人々は自然や他人への思いやりを持って皆が生活しているということだった。ビエンチャンとノンカム村では物量的豊かさは異なるものの、共通点として、皆が他者との関わりを重視し、心の休まる家族という場を大切にしていた。本来の豊かさとは、もちろん日本のように経済的なものも必要だが、それ以上に人・環境・心の豊かさが重要なのだと、今回のラオス研修を通して身をもって学ぶことができた。今、経済成長真っ只中のラオスの変貌にこれからも注目していきたいと思う。

反省・改善

今回の研修の反省点としては、次の二つのことが挙げられる。

一、村でのホームステイ中に持つ疑問に対し各々がちゃんと解決しなかったこと

二、ワークショップ進行の効率

一、について

今回、研修のテーマである「お手伝い」について学ぶために村ではワークショップ調査を実施し、実際にお手伝いをさせて頂いた。振り返りのとき、各家庭で食事の準備や、食器洗い、掃除など様々なお手伝いをしたことを報告し合った。しかしその中で洗濯について（誰がいつどこでなど）はつきりとした情報がないことが指摘された。研修のテーマであるお手伝いの情報不足は致命的なミ

二、について

スであった。また村の電力はどのよう
に供給されているのか、衣類などはどの
ように入手しているのか、電
化製品が入ってきたことをどう思
うか、各々のホームステイ先で確認す
べきことをしていなかった。少しで
も疑問に思ったことをその場で聞く
心が必要だったと思う。

ワークショップ班による調査を村
の学校にて行った。調査そのものは
研修前にシミュレーションを重ね
て、しっかりと準備していった。しか
し予想以上に村の方々に多く集まっ
ていただき、開始が遅れるというこ
とが起きてしまった。それにより同
じ日に行うはずであった調査も、時
間の都合でできなくなってしまった
のである。その日にならないと分か
らないようなことにも、柔軟な対応



第4章：未来に向けて

ができるようになる努力がもう少し
必要であったと思う。

三輪 玲奈

私たちが広げられること

私たちはこのラオス国際協力研修で、日本では経験できない様々なことを経験することができた。村の中で、子どもたちと毎日遊んだり、ホストファミリーと一緒に釣りや畑へ行ったり、自給自足を間近で感じたり、その村独自の生活を送ること、日本にはないものを私たちひとりひとりがいろんな視点から発見することができた。しかし、わたしたちがラオスで得たことを自分の中に吸収するだけが研修の目的ではない。帰国してから、私たちがどのようにラオスで得たことを発信していくかということこそが大事なのだ。その機会として、中高生を対象にした開発教育と本学で行われる和祭での報告会の機会がある。現代、私たちの社会は商業的な利益や経済的な効率ばかりを優先させてきた。そしてそれは、弱い立場に追いやられる人々を生み、現在と未来の全ての命にとって大切な

地球環境を破壊してきてしまった。そうした社会の中で私たち自身もいつしか豊かさの意味を見失いつつあるようだ。物や金がありふれていれば豊かなのか、そうではない。私たちが研修参加者は、最低限の生活のなかで、人と人とのつながりの深さや地域のつながりが深いことが心の豊かさへつながることを身をもって感じてきたのだ。私たちはこの機会でもう一人に「豊かさ」について再考してもらいたい。そして、「途上国」と聞くとき誰しもが「かわいそう」という感情を抱いてしまう。でもそれは私たちが自分たちの置かれている立場を基準として、物事を考えてしまうからである。ラオスも世界的にみればいわゆる途上国のひとつである。しかし、私たち研修参加者のなかでラオスをかわいそうだと思って日本へ帰国したメンバーはいないと思う。むしろ、日本にないラオスの「豊かさ」

を羨ましく思った。ラオス以外にも、世界には独自のアイデンティティーや生活様式を持つ国がたくさんある。開発教育で大切なことはその世界の多様性を理解することだ。自分の置かれている立場だけを基準にするのではなく、世界で生活する多くの人がそれぞれの独自の文化、生活、威厳を持っているということをラオスを例に中高生や報告会に来てくれた人たちにわかりやすく説明し、理解してもらいたい。私たち研修参加者がラオスでの活動、学んだこと、世界の現状を発信することで、いろんな人が少しでも興味をもっていただけのように働きかけていくことが、私たちができることだと思う。

中丸 紗恵

報告会

私たちは二〇一四年九月四日、十二日までの九日間ラオスにて研修を行った。今回の研修のテーマは『豊かさ再考』。ラオスの子どもたちのお手伝いから学べることである。豊かさとはしばしば経済的に発展しているのかどうか、便利なのがどれだけあるか、ということと測りがちであるが、まずその固定観念に疑問を持って真の豊かさを考えるのがこの研修の大きな目的だ。今回私たちは都市から離れたノンカム村に三泊ホームステイをし、お手伝いやワークシヨップなどを通じて『豊かさとは何か』ということを考えた。ワークシヨップではラオスの人々の一日のタイムスケジュールを世代別に調査し、日本の同世代のものと比較をした。また、私たちもホームステイ先のご飯の準備などのお手伝いに参加し、お手伝いから生まれるコミュニケーションや人と人とのつな

がりを肌で感じることができた。この期間だけで豊かさとはこういうことだというはっきりとした結論付けまでにはなかなか至ったとは言えないかもしれない。しかし、研修終盤の振り返りの時間では、各々が研修で感じたことなどの意見交換をし、お手伝いが人と人とのつながりを強める手段の一つであったり、親子へ生きた術を伝える手段であったりするのではないかという気づきがあった。このとき自分たちの日本での生活を省みるとともに、真の豊かさとは何か、ということ、うっすらではあるがつかめたように思う。帰国したからと言ってラオス研修は終わりではない。私たちが9日間のこの研修で感じとったことをいかに自分の今後の肥やしにできるか。また、いかに他者へ発信し共有できるか。これからはこれらのことを考え、実行していかなければならない。この

貴重な経験を生かすも生かさないもこれからの私たち次第である。そこで、その他者への発信の機会の一つとして、和祭での報告会をする機会をいただいた。この報告会では研修中の様子を紹介したり、現地で行ったアクティビティの結果報告をしたりする予定である。また、現地で購入したラオス雑貨を販売し、少しでもあるがその収益を今回の研修で訪問させていただいた、特定非営利法人ラオスのこどもへ寄付する予定だ。沢山の方々に来ていただきラオスのことを知ってもらうこと、また、真の豊かさとは何かということ、今更にもう機会を提供することで、今回私達に様々なきっかけを与えたもらったラオスに恩返しができるように、報告・販売ともにしっかり準備してやっていきたい。

鈴木 のぞみ

挨拶

平成二六年度、第十五回学習院女子大学ラオス国際協力研修が夏に実施されました。本年度も二十五名という学科・学年を超えて多数の学生が参加し、国際協力への関心が本学でも確実に高くなってきていることが推察されます。本研修は、研修の大枠は女子大学が提供いたしました。が、現地、特にルアンパバンノンカム村での活動は、すべて学生たちが企画・実施いたしました。訪問する国や人々の情報が十分でない中、すべてが試行錯誤の連続だった本研修の意義とその成果ははかりしれないものがあります。第一に、現場を可能なかぎりの情報を集めながらイメージし、ラオスでの活動を企画することができました。その描いたイメージと実際のラオスに驚き、とまどいました。とまどいから、研修参加者が実際に見て、触れた本当のラオスを知り、理解することができました。第二

に、真の豊かさについて考えることができませんでした。何不自由ない生活をしている自分たちの生活を振り返ることができました。そして最後に、研修参加者が触れたやさしさを、今度は研修参加者自身が周囲に伝えていこうという行動につながっています。本研修の醍醐味は、知る、振り返る、伝えるなど幾十にも可能性を無限に広げることです。一つの出会いを形を変えて、自分や他者の成長につながせていきます。「使い捨て」社会に生きる中、忘れかけていたモノ・ヒトを大切にすることをはっと気づかされることしばしばあった研修になっていきます。豊かな日本のモノにあふれている生活をしていると、あるいはあふれているゆえになのかもしれませんが、昨今は欲求や権利は主張し、自分の責任を認識せずの行動が目につきます。自分の責任はさておき、より多くを求め、時には

周囲・他者を責めて自分の権利を主張する。そんなことが残念ながら少なくありません。自分の責任を認識せずに人に何かを求め続ける、この事実さえにも気づかない人も多いです。二〇〇四年当時、本研修を企画・実施させていただきました一つの大きな背景にイラクでの日本人質事件がありました。人質事件の状況が明らかに以前から、連日、悲しいまでに誹謗中傷が多く、それらの報道に、心を痛めました。報道される心無い言葉は、自分が行動をしないばかりか、イラクの惨状を知ろうともしない人々からのものが多かったです。国際協力・援助はグローバルゼーションが進む今日、国際社会のリーダーとして日本が積極的に関わっていかねばならない分野です。それは、必ずしも現場を支援する、現場に行くということではありません。関わるということは、まず、自分の生



第5章：お世話になった方々



お世話になった方々

活圏以外のところで、何が起っているのかということ、正確に「知る」ということです。本研修参加者が、将来、国際協力に携わらずとも、温かい気持ちで世界で起きていることを知り、見守り、できるかぎりの「一歩」を踏み出されてこそ見出されると思います。研修に関わる準備や振り返りというのは、コメントメントを要するものの意外とできるものです。しかし一連の活動を離れ、研修参加者個人が、さて、いかに研修の机上では学び得なかった体験を普段の生活の中でさらなる行動にうつせるのかと考えた場合、必ずしも容易ではありません。「できるかぎりの一歩」とは申しますものの、行動には多少ならずとも自分をおしてあげる、努力をすることも必要です。学業、課外活動、バイト、そして就職活動ととにかく忙しい大学生活の中で

時間と心の余裕をつくり、ぜひ、その「一歩」が踏み出されますように。最後に、学生のイニシアティブに賛同し、温かいご協力を賜りました多くの方々、機関の皆様に改めて深く御礼申し上げます。今後ともこの活動に、温かいご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

学習院女子大学
国際文化交流学部
国際コミュニケーション学科
教授 伊藤 由紀子

【ラオス】

- ノンカム村の皆様
- ラオス日本人材開発センター
- ラオス国立大学 (<http://www.nuol.edu.la/>)
- Green Discovery (<http://www.greendiscoverylaos.com/>)
- ジャンピングシアー (<http://www.jumping.lao.com>)

【日本】

- 独立行政法人国際協力機構 JICA 東南アジア大洋州部第二課 樋口創氏 (<http://www.jica.go.jp/>)
- 安井清子氏 (<http://www.7abiglobe.ne.jp/~pajhnb/>)
- 特定非営利活動法人ラオスのじゅん (<http://homepage2.nifty.com/asptokyo/index.htm>)
- 特定非営利活動法人難民を助ける会 AAR JAPAN (<http://www.aarjapan.gr.jp/index.html>)
- JTBコーポレートセールス教育第一事業部 (<http://www.jtbwt.com/>)
- 学習院女子大学 草上会 (<http://gakushuin-ouyukai-branch.jp/soujoukai/>)
- 学習院女子大学教職員・学生・卒業生の皆様

ラオスTシャツについて

今回私がデザインしたTシャツのテーマは「ラオスと日本の友好」である。

私はTシャツをデザインする上で第一にラオスらしさ、そして日本らしさを表現したかった。したがって、左側には日本の象徴である富士山と桜、そして右側にはラオスで有名な、ビエンチャンにあるタートルアンと夕日や南国らしい木を描き、左右で対比させた。それぞれの国らしさを描きながら、その下では手をつなぎ、日本の学習院女子大学とラオス共和国の友好の証を表した。もちろん、左側の手が日本人の手、右側がラオス人の手である。

それらをハートでくくることで、女子大学らしさも少し出せたのではないかと思う。このデザインは大変多くの人に称賛され、気に入ってもらえたようで、これからのラオス研修で引き継ごうという声もかけられ、大変嬉しく思う。

このデザインを考えるのに時間をとられたため、Tシャツの前側のア

イデアはなかなか浮かばなかった。後側に力を入れたので、前はゆるめにしてもいいのではないかというアドバイスを友人からもらい、ふと思いついた駄洒落をそのままデザインにした。「ラ」を「押す」で「ラオス」マークである。もうひとつ「ラ」を「吸う」で「ラオス」も思いついたのだが、それだと「ラオスウ」になってしまいうので却下した。「ラ押す」のマークは日本人にしかわからない意味なので、もっと他に考えた方がいいのではないかと迷ったりもしたが、ラオス研修参加者全員にいくつかのデザイン案を見せ、アンケートを取った結果、このマークに最終的に決定した。個人的に遊び心も入れた、いいTシャツとなったのではないかと自己満足している。完成品を伊藤先生に見せた際に前方の「ラ押す」マークを見て、「雄だからラ雄でラオスなのね」と言われたことを後日談として友人から耳にし、その意味も後付けしたいと思った。

色合いも何パターンか挙げてパン

コンでサンプルの色をつくり、みんなにアンケートを取った結果、水色とピンクという色合いとなった。水色はラオスの青く透き通ったきれいな空、そこに映えるショッキングピンクはラオスと日本の友好の証をくっきりと浮き立たせ、また私たちの若さあふれるパワーも表現できる素晴らしい色合いになったのではないだろうか。

私はデザインのみで、Tシャツの発注などは小野田ひかり、根本真莉絵が行ってくれた。また、アンケートに答えてくれたラオス研修参加者の皆の協力があったからこそ、このTシャツを完成させることができた。この場を借りて感謝したいと思う。



おわりに

今回の研修では「お手伝い」をキーワードにラオスの「豊かさ」を知る機会となりました。「開発途上国であるからモノがなく貧しい」のではなく、日本と違ったラオスらしい「豊かさ」を体感し、私たちにとって非常に満足度の高い研修となりました。私たち研修参加者のほとんどが初めてのラオス渡航ということもあり、戸惑いも多かったですが、たくさんの方々に支えられ、ラオスでそれぞれが学びを得て、帰国することができたのだと感じています。そして、これから報告会や開発教育の活動を通して、私たちが体感したラオスの「豊かさ」を研修参加者全員で協力し、より多くの方々へ発信していけたらと考えています。

最後となりましたが、本書に最後まで目を通していただき本当にありがとうございました。私たちの活動はまだまだ途中ですが、本書から私たちがラオスで体験したこと、感じたもの、学び得たものを少しでも感じていただけると、研修生一同心より祈っています。

平成二十六年
研修参加者全二十五名

石渡利奈	市川美華	大曽根優衣	大野夏菜
小川杏奈	小川里彩	小野田ひかり	金子ひかり
金智美	久保結奈	佐藤由理	鈴木笙子
鈴木のぞみ	中西花穂	中丸紗恵	永井詩織
根本真莉絵	半沢里実	藤井さち	古谷理恵
星川亜紗美	丸山実可子	三輪玲菜	村田瑛美子
吉田千織			

学習院女子大学ラオス国際協力研修報告書

二〇一四年十月十八日発行

監修：伊藤由紀子

編集責任者：佐藤由理・中西花穂・半沢里実

